

第3節 午王山遺跡出土弥生土器の編年的位置づけ

柿 沼 幹 夫

1 はじめに

本稿は、午王山遺跡の主要遺構である弥生時代後期の環濠集落の成立と展開過程を明らかにするために、時間的位置づけと文化的系統性を土器によって述べることを目的とする。午王山遺跡を乗せる武蔵野台地周辺の弥生時代後期土器編年研究は、特に1970年代以降、岡本孝之氏の久ヶ原・弥生町式併行論を契機とする混迷状況（久ヶ原・弥生町問題）にあったが、近年、一定の方向性が見えつつある。

2000年前後の研究概況 2000年前後までの松本 完氏と黒沢 浩氏による学史的総括（シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編2005）では、両者ともに原典とも言える戦前の『弥生式土器聚成図録』（森本・小林編1938・1939）、戦後の『弥生式土器集成図録』（小林・杉原編1968a・b）が「南関東」という架空の領域を先験的に設定し、同一の土器文化圏としたところに混乱の要因があるとしていた。こうした問題意識をもとに、黒沢氏は、横浜市二ッ池遺跡の分析から二ッ池式を設定し（黒沢2003・2005）、松本氏は新宿区下戸塚遺跡出土土器の分析（松本1996）、更には和光市午王山遺跡とその周辺遺跡の土器群を分析した（松本2007）。前者は東京湾西岸域（多摩川下流・鶴見川下流域）の、後者は武蔵野台地北半域の後期土器群の様相と編年を実体的な領域から把握しようとした点に意義があった。更に、東京湾東岸域を対象とした編年研究では、大村 直氏が市原市周辺の土器群を分析し、後期前半に久ヶ原式を置き、後期後半には山田橋式を設定した（大村2004）。「弥生町式」という呼称を使用せずに「山田橋式」を用いたのも、地域様相から土器編年を再構築しようとした研究姿勢と見られる。

一方、比田井克仁氏は様式論の立場から後期を3期区分し、Ⅰ期が久ヶ原式で、Ⅱ・Ⅲ期以降に三つの様式圏に分かれるとした。篠原和大氏の端末結節縄文と自縄結節縄文の研究（鮫島1994）も取り入れて、甕の整形手法の分布を基準に相模地域の相模様式（端末結節縄文・ハケ調整甕）、東京湾東岸房総地域と三浦半島の房総様式（自縄結節文・輪積み痕系統甕）、両者が混在する東京湾西岸の南武蔵様式に分け地域区分した（比田井2005）。更に、南武蔵様式の範囲は三つの地域性があるとし、第一の地域性が横浜・川崎・多摩川下流域、第二の地域性が多摩川下流域の一部を除く武蔵野台地一帯、第三の地域性が大宮台地南側とした。

2010年以降の研究概況 2010年の齋藤瑞穂氏の「下戸塚式」の提唱は、武蔵野台地北半の後期中葉前後の土器の特徴をよく捉えたものであり（特に1式）、批判的継承をなすべき価値を備えていた（齋藤瑞穂2010・2018）。齋藤氏は、武蔵野台地を刻む神田川流域にある下戸塚遺跡の環濠内住居群から出土した装飾壺を対象に、松本氏の批判的継承という立場から検討を行い、その成立に東海地方の菊川式の関与があったことを認めつつも時間の経過に従って独自の変遷をたどったとした。一方で環濠外エリアの土器群は、久ヶ原式の諸要素を受容しつつ平行区画帯縄文と下向き三角文を特徴として独自の変遷を遂げ荒川水系沿いに波及していったとする。そして、前者を下戸塚1式、後者を下戸塚2式と呼称することを提案した。

2014年、古屋紀之氏は比田井氏や齋藤氏の地域性の考えを取り入れながら検討を加えて、南武蔵地域を北部様式と南部様式に二分し、その境を目黒川としている（古屋2014・2015）。南武蔵南部様式は多摩川下流域と鶴見川流域が中心域で、港北ニュータウン中の北川谷遺跡群の土器編年を行い時間軸の指標とした。後期前半は沈線区画の羽状縄文帯・山形文帯壺とナデ調整多段輪積み甕を指標とする久ヶ原式土器圏で、後期後半には北部との境が多摩川北岸まで下がり、壺は重山形文系幾何学文の多重化が進み、ナデ台付甕にハケ甕が混じるようになる。南武蔵北部は、武蔵野台地東部は後期前半には久ヶ原式土器が分布するが、北半では筆者の考え（柿沼2013）を取り入れて白子川流域を中心に北武蔵の岩鼻式の南下があって久ヶ原式と混成するとした。そして、後半には菊川系の影響が強まる一方、壺における複合口縁の発達や幅広一帯の縄文帯など久ヶ原式の要素が独自に発達する、とした。2018年には学史的背景と近年に至るまでの研究動向を総括し、久ヶ原式と弥生町式に代わる様式・型式名の整理案を次のように提示した（古屋2018）。

	後期前半	後期後半
東京湾東岸	久ヶ原式	→ 山田橋式（久ヶ原式系）
南武蔵南部	久ヶ原式	→ 大原式（久ヶ原式系）
南武蔵北部	下戸塚式前半 菊川式・久ヶ原式混在	→ 下戸塚式後半 狭義の弥生町式（東海東部・相模系） 仮称田端道灌山式（久ヶ原式系）

古屋氏が後期後半の南武蔵南部の様式（型式）名に久ヶ原式、弥生町式の呼称を用いることに反対しているのに対し、安藤広道氏は杉原荘介氏の久ヶ原式、弥生町式、前野町式という学史的名称の復活と現在の資料による再編成を強調している（安藤2015a・2015b・2017）。その方法は、山内清男氏の縄文土器研究の文様帯分析を基準に、壺の文様を口縁部（Ⅰ）と頸胴部（Ⅱ）に分け、その構成を型式的に捉え直すもので、久ヶ原式に関しては菊池義次氏の久ヶ原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式を再評価し継承すべきとしている⁽¹⁾。そして、南武蔵北部域の単純な端末結節や自縄結節文区画の幅広羽状縄文帯、棒状浮文を多用する特徴的な複合口縁を弥生町式土器と呼ぶことも十分可能としている。以下、安藤・齋藤・古屋氏の論攷と松本 完氏の下戸塚遺跡や午王山遺跡等に関する分析結果⁽²⁾を基本ベースに、一部批判的検討を加えて午王山遺跡出土土器を分析していくことにする。

2 午王山遺跡出土土器群の段階区分

午王山遺跡出土土器については、松本 完氏の精緻な分析による優れた編年研究があり（松本2007）、大方は準拠することに異存はない。ただ、筆者は細かいいくつかの点で異見をもっており（柿沼2009・2013）、次項では現時点の考えも取り入れながら記述を進めることにする。結論めくが、午王山遺跡出土土器から見た集落形成の段階区分は次のとおりである。1期・2期と時期区分せず段階としたのは、連続性があるとは限らないからである。

第1段階 弥生時代中期後半 宮ノ台式Ⅴ期

第2段階 弥生時代後期前半 岩鼻式2・3期と久ヶ原Ⅰ式の混成

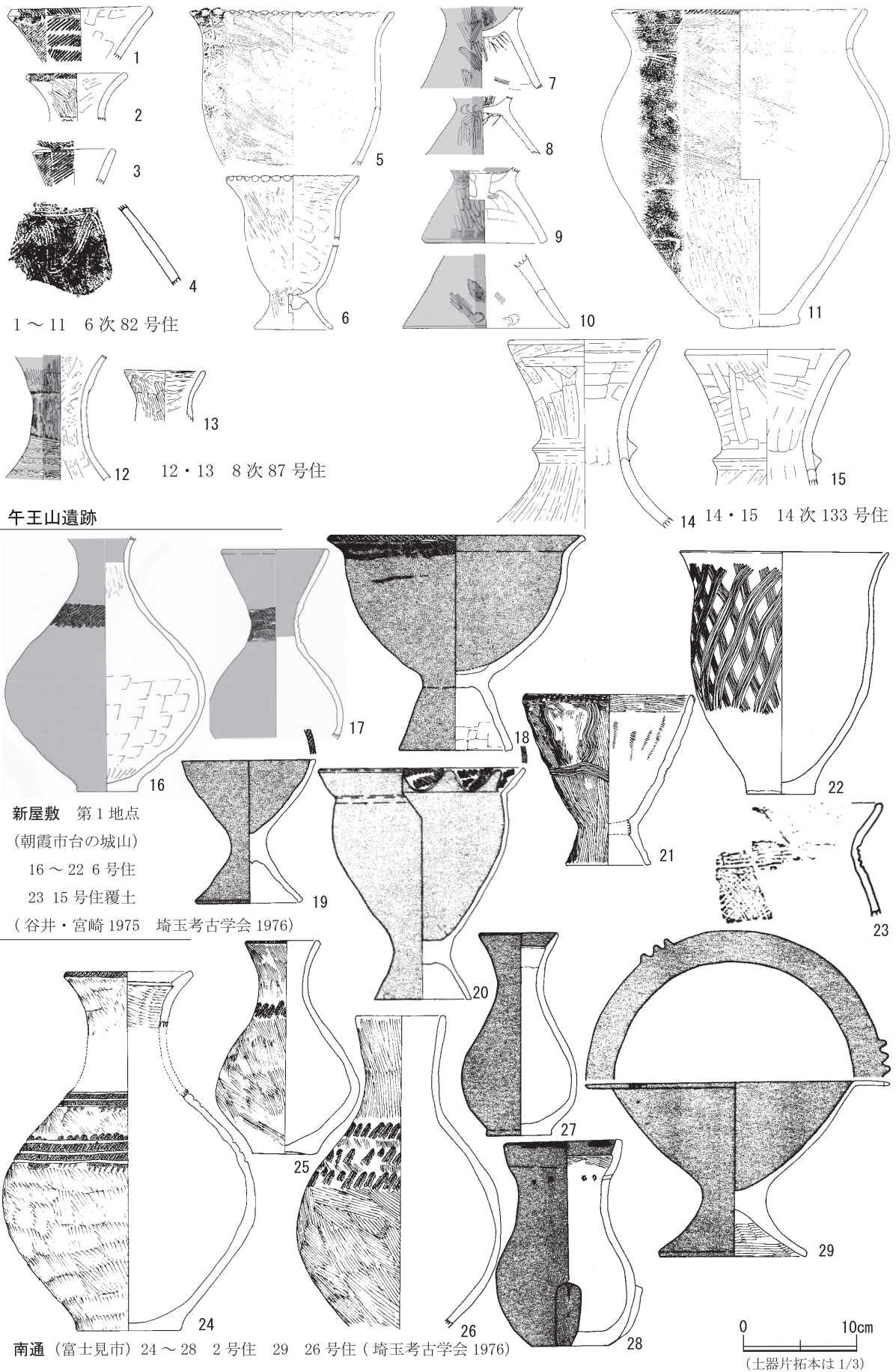
第3段階 弥生時代中葉前後～後半 下戸塚式（菊川式系と久ヶ原Ⅱ式の混成）

(1) 第1段階

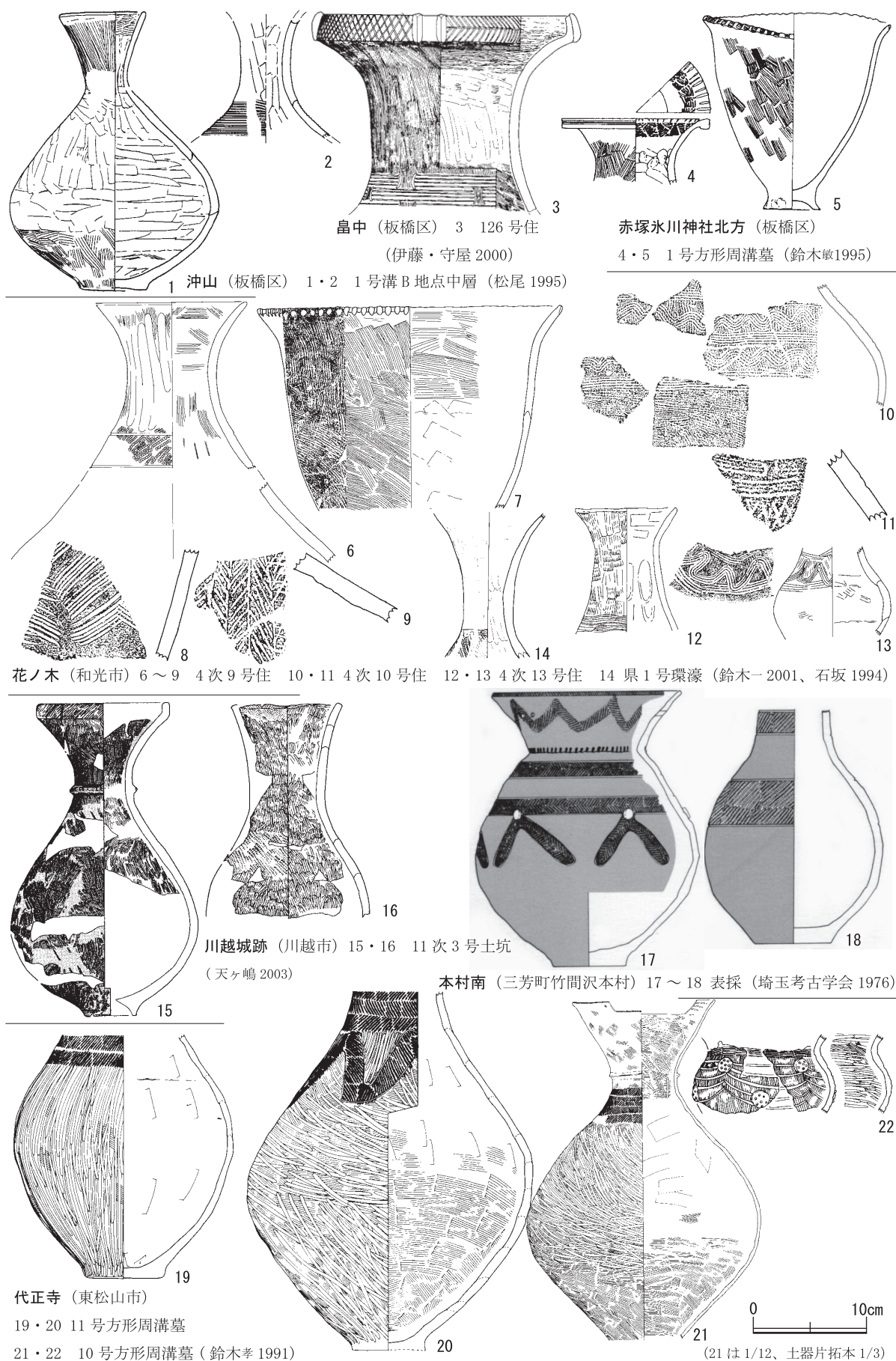
① 旧入間川流域の状況 旧入間川流域（現・荒川流域）には、安藤広道氏の Si 編年（安藤 1990・1996）の宮ノ台式Ⅲ期からⅤ期に至る遺跡が点在しており、下流域の武蔵野台地崖線には東京都北区／飛鳥山・赤羽台、板橋区／中台畠中、沖山、氷川神社北方、白子川を越えて埼玉県和光市／午王山、花ノ木、朝霞市／向山、新屋敷第1地点（台の城山）、富士見市／南通などの遺跡をあげることができる。更に遺跡は入間川を越えた荒川中流域右岸にも及んでいて、入間台地の川越市／川越城跡、猫田、霞ヶ関、登戸、坂戸市／木曽免、附島、塚越渡戸、高坂台地の東松山市／代正寺、野本氏館跡、吉見丘陵の吉見町／大行山などの遺跡があり、周辺の低地帯微高地にも東松山市／反町、吉見町／三の耕地などの遺跡がある。そして、比企丘陵と吉見丘陵に挟まれた東平台地には熊谷市／円山、船木などの遺跡があり、現時点における宮ノ台式の分布北限をなす。Si Ⅲ期の分布北限は越辺川以南の木曽免遺跡、附島遺跡であり、擬流水文や斜格子文など東海東部の白岩式系統の櫛描文土器が特徴的である。Si Ⅴ期では更に北上した荒川以南の円山遺跡が北限で、頸胴部に斜縄文を施した壺が主体である。円山遺跡からは、眼下に新期荒川扇状地と東側低地帯とからなる妻沼低地を望むことができる。妻沼低地には、関東地方における灌漑水田稲作農耕の定着を示す池上、前中西、北島、諏訪木遺跡等が展開している。荒川以北の中期中葉から後半の土器は池上式（古・新）→北島式（古・中・新）→仮称用土・平式と展開するが（石川・松田 2014、柿沼 2014）、時間が下るにつれて北信地方の栗林式土器の影響が濃厚になる。荒川以南の比企・入間地方でも栗林式が宮ノ台式に混じて出土する木曽免遺跡や塚越渡戸遺跡等があり、木曽免遺跡では北島式土器も伴っている。

② 午王山遺跡とその周辺域 午王山遺跡の3軒の住居跡から出土した土器群（第230図1～15）は、完形土器や器種構成が不十分であるが、壺の構成は住居ごとにバラエティに富む。82号住出土の小型壺口縁部1・3の縄文帯は単節縄文（LR）であり、2の頸部にはS字状結節文が見られる。この結節文は、おそらく重畳結節文として頸部文様帯を構成するもので、大宮台地南部ではさいたま市／御蔵山中遺跡、松木遺跡、大北遺跡など Si 編年のⅤ期に盛行している（柿沼 2003）。133号住出土の壺2点（14・15）は頸部に突帯が付されたもので、14には口縁部内面粘土帯がある。2点ともに無文で赤彩がなされず加飾性に乏しいが、頸部突帯は重畳結節文と同様に大宮台地南部では大北遺跡や円正寺遺跡などⅤ期に顕著に認められる。87号住出土の壺は細頸部に2段の刺突の加えられた輪積み痕があり、肩部に櫛描波状文が施され無文部は縦にヘラミガキ・赤彩がなされている。82号住では赤彩された高坏脚部が4点（7～10）出土しているが、宮ノ台式の高坏には坏部が鉢・深鉢状をなすもの（第1図18～20）と口縁部が鐙状をなすもの（29）があり、後者の脚は末広がりである。7～10の脚はいずれも台状であることから、坏部は鉢状のものと推定できる。

ところで、1・2のLR斜行縄文を近隣のⅤ期の例と比較してみると、新屋敷遺跡第1地点（台の城山遺跡）の2例（第230図16・17）、南通遺跡2号住の3例（第230図24～26）、花ノ木遺跡4次9号住出土大型壺肩部の沈線区画縄文（第231図6）は、いずれも単斜方向の縄文（LR）である。更に北方の川越城跡11次3号土坑では頸部に突帯をもち赤彩された壺（第231図15）と共伴した壺（16）も単斜方向の縄文（RL）である。このような例から午王



第230図 午王山遺跡の宮ノ台式土器と周辺遺跡との比較 - 1



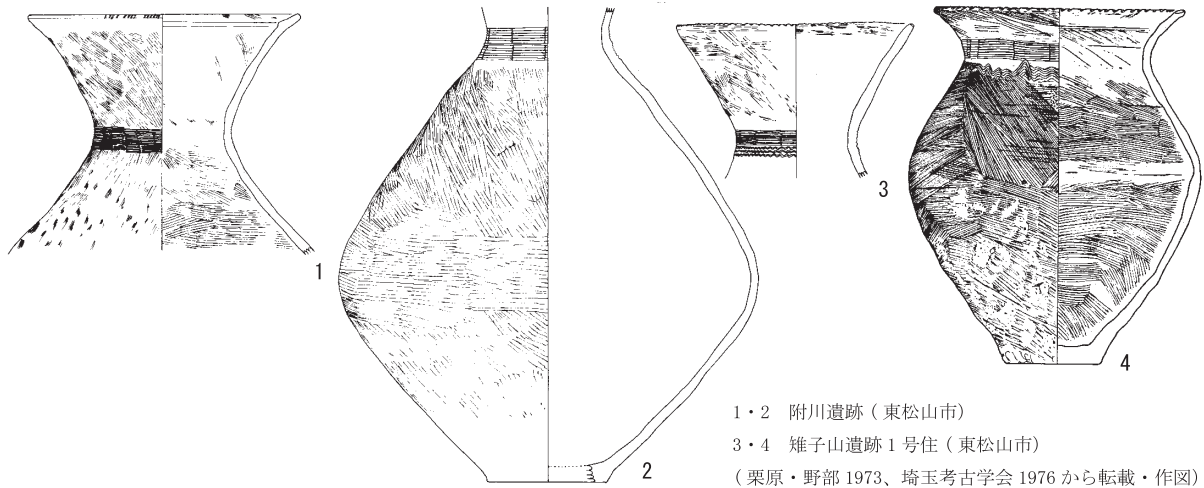
第231図 午王山遺跡の宮ノ台式土器と周辺遺跡との比較 - 2

山遺跡周辺のV期の縄文壺は単斜方向の縄文（LR優勢）が主流のように見えるが、三芳町／本村南遺跡出土広口壺（第231図17）の2帯縄文と結紐文は羽状縄文である。そして、口辺部の山形文・結紐文頂部のボタン状貼付文や、壺18の羽状縄文ではないが沈線区画された2帯縄文帯は後期の久ヶ原式土器に繋がる新しい要素をもつ。代正寺遺跡11号方形周溝墓出土壺頸部縄文帯は羽状縄文であり（第231図20）、胴部上半の結紐文は接続して山形文風になっている。10号方形周溝墓の大型壺（21）は頸部突帯下の縄文帯も羽状縄文である。このようにみると午王山遺跡の宮ノ台式はSi編年のV期であるとしてもその前半であり、後半は羽状縄文を有する土器群を充てるべきかもしれない。従って、午王山遺跡の中期集落と後期集落は時間的に連続せず間断期が存在した可能性も考えられる。

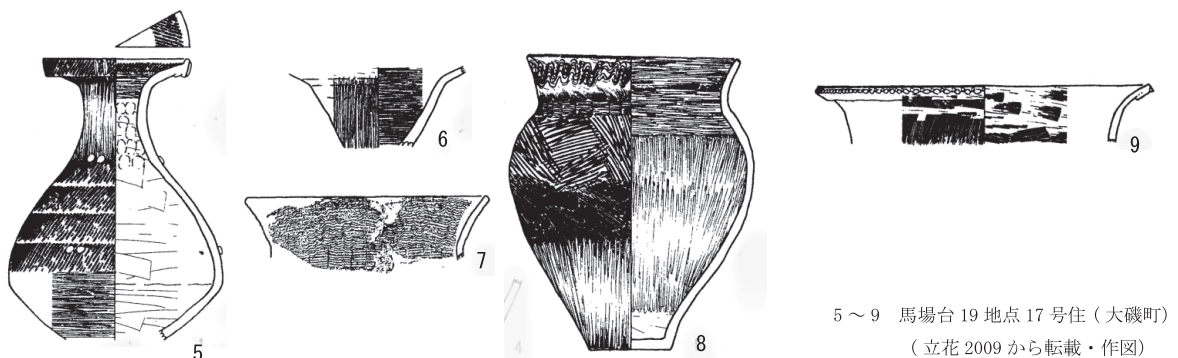
次に、中期後半段階における他地域との交流関係について触れてみたい。午王山遺跡では82号住出土の大型甕（第230図11）は、松本 完氏が系統は定かでないが宮ノ台式ではないとし、中部高地型櫛描文土器である西毛の竜見町式（栗林式系）の甕から櫛描文を除いたものと推測しており、筆者も同意したい。入間川を越えた北武蔵の比企・入間地方は宮ノ台式の北限域で荒川中流域を境に栗林式土器分布圏と接触し、荒川以南にも栗林式系土器が混じって出土しており、代正寺遺跡10号方形周溝墓出土の小型台付甕（第231図22）はその一例である。それが更に入間川を越えて南下し、新屋敷6号住の甕（第230図22）は頸部櫛描簾状文のない変形品、15号住覆土の甕（23）は頸部櫛描簾状文と胴部櫛描斜格子文を備えた忠実品である。朝霞市／向山遺跡1地点7号住では、コの字重ね文の出土事例もある（安田2017）。花ノ木4次9号住の甕（第231図8）には縦羽状の櫛描文が認められる。以上のような長野県（北信）から群馬県（西毛）との関係が考えられるものがある一方、東海地方との関係が窺えるものがある。そもそも宮ノ台式の成立には東海地方東部（東遠江）の白岩式土器の影響が濃厚とされており、午王山遺跡の近隣でも畠中遺跡126号住の大型壺（第231図3）、沖山遺跡1号溝出土の壺2点（1・2）、花ノ木遺跡4次10号住・11号住出土土器（10～13）の櫛描擬流水文・斜格子目文・横線文・波状文などがその特徴をよく示すSiⅢ期である。花ノ木4次9号住出土の壺破片（9）や県1号環濠出土の縦位区画文（14）は白岩式の最新相で、移動品の可能性がある。氷川神社北方遺跡1号方形周溝墓出土の壺（4）は、凹線文の口縁部を有する西遠江以西に由来があるものである。後期になって顕著となる中部高地型の岩鼻式土器の南下、その後の東海東部の菊川式土器の東進に先立って中期後半から末葉段階に両地方との交流があったことが示されている。

（2）第2段階

① 岩鼻式土器の南下 弥生時代後期初頭は列島規模で遺跡が激減し、前期以来発展してきた各地の弥生社会がいったん急激にしばむという（石川2010 p.182）。東京湾沿岸地帯における後期初頭から前半の位置を占める久ヶ原Ⅰ式土器は、大宮台地から荒川低地では存在が皆無であり、後期初頭の遺跡を見出すことはできない。列島規模の遺跡の希薄化は荒川低地とその周辺部でも例外ではない。その一方で、遺跡の稀少化はあっても中期後半から後期への糸は細々ながらも繋がって後期土器文化を形成する地域がある。東京湾東岸の市原台地を中心とする地域は、宮ノ台式から久ヶ原式への連続過程を追うことが可能であり（大村2004・杉山2010）、北武蔵の中核を占める荒川中流域右岸地域（比企・入間地方）でも宮ノ



① 午王山遺跡にはない岩鼻式1期



② 菊川式・最古・岩鼻式1期・久ヶ原I式最古の時間的併行関係を示す資料

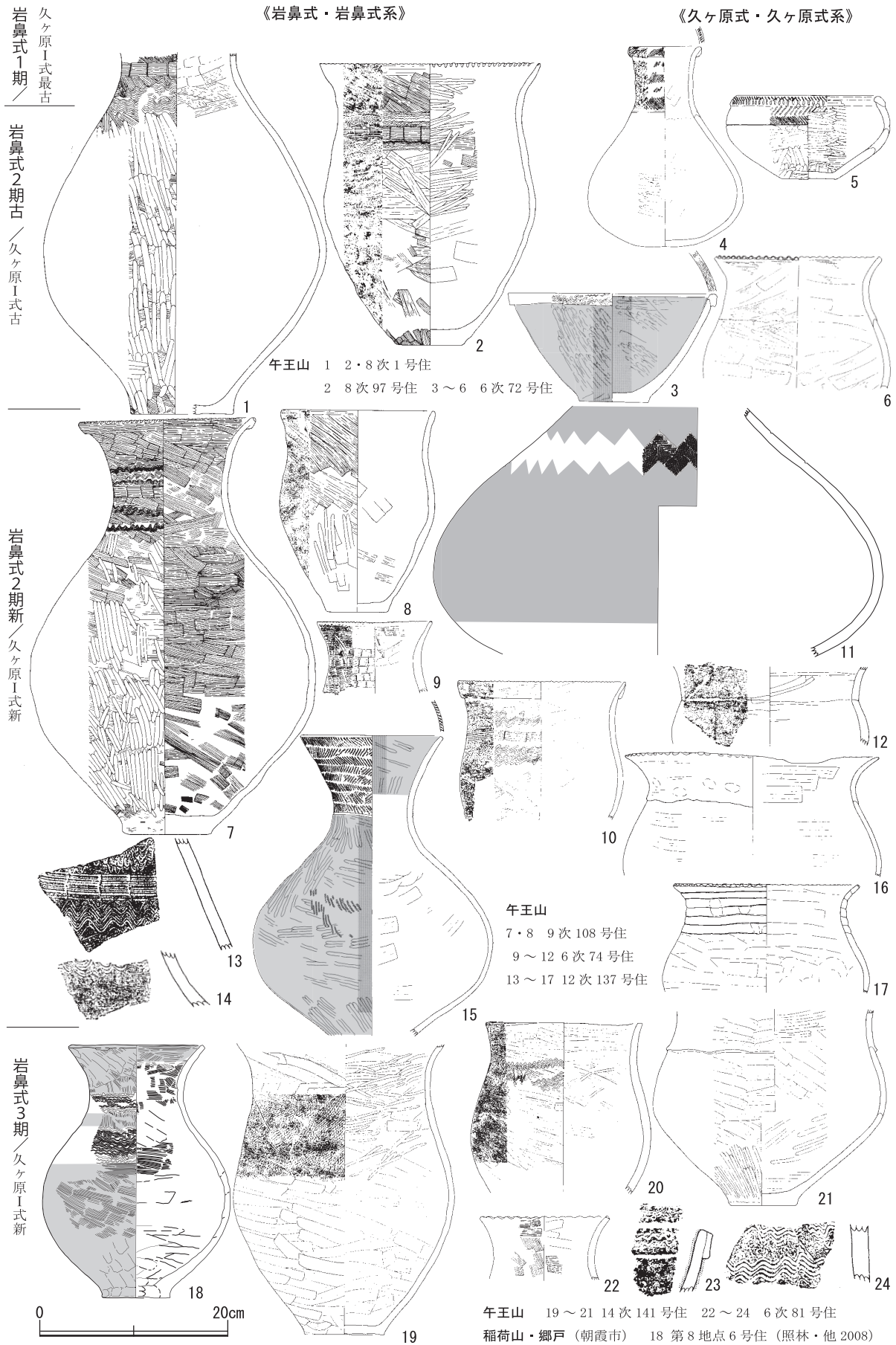
第232図 岩鼻式土器1期と時間的併行関係を示す資料

台式から後期櫛描文土器（岩鼻式土器）への連続した推移を辿ることができる。

荒川中流域右岸地域は、中期後半において宮ノ台式の分布圏北限をなし、荒川を境にして中部高地型櫛描文土器の栗林式土器分布圏と接触する。中期末葉から後期にかかるかと言う時期には、中部高地型分布圏の拡大によって仮称「代正寺式」土器という過渡期を経て岩鼻式土器が生成され、中部高地型櫛描文土器の周縁部を形成する。多摩丘陵の朝光寺原式土器の生成もその一環であり、両地域は関東西部山地沿いの山ッ道を通じて日常的な交流が行われていたものと考えている（石川_安・柿沼・宅間 2017）。岩鼻式土器は、壺・甕がともに櫛描簾状文・波状文を主体としており、大きく3時期（1期・2期・3期）に区分できる（柿沼 2006）。

1期（第232図①）は、壺・甕がともに単口縁主体の胴部中位が張る算盤玉状の器形で、文様は頸部に集中し櫛描簾状文a（等間隔留め）を基調に波状文が丁寧に描かれる（波状文a）。甕は口唇に刻みを施すのが基調で指頭押捺もあり、壺と同様の頸部文様に加え胴部にも中期後半からの系譜を引いて櫛描縦羽状文・斜格子状文・斜状文を施す場合が多い。

2期は、口縁部の伸張化傾向と複合口縁の明確化、頸部の緩曲化と胴部の円形化があり、櫛描手法も1期に比して原体がやや細く、簾状文aが踏襲されるが乱れが生じ、波状文も同様である（波状文b）。段重ねの簾状文の盛行、甕の胴部文様が稀少化するのも2期の特徴



第233図 午王山遺跡とその周辺域 後期前半期の土器編年

である。2期は2区分（-1・-2）でき、-1期は壺の折返し口縁が未発達であり、-2期は壺の折返し口縁の肥厚化（断面三角形・四角形）、甕における頸部の曲線化と胴部の張りがより少なくなる。

3期は、櫛描手法が弛緩し簾状文aを継承しながらきちんと止めないもの、脱落するものがあり、頸胴部装飾帯（主に波状文b）が幅広くなる。筆者が頸胴部帯縄文甕と呼称している甕は、頸胴部装飾帯の櫛描波状文が縄文に置き換えられたもので3期中に登場し吉ヶ谷式土器に継承される。頸胴部帯縄文甕と同時に壺にも縄文を施すものがあり、両者は後期中葉前後の一時期に東信・佐久地方の箱清水式土器、西毛の樽式土器、多摩丘陵の朝光寺原式土器にも伴っており、後期前半から後半を繋ぐ広域的な交差編年の鍵となっている（柿沼2016）。

以上のような変遷をなす岩鼻式土器を使用する集団が、入間川を越えて人口希薄な武蔵野台地北半の一角、白子川や越戸川流域に進出し、東京湾西岸の久ヶ原I式土器を使用する集団と混成して形成した集落の一つが午王山遺跡である。近隣では、数少ないながら氷川神社北方遺跡や朝霞市／稻荷山・郷戸遺跡も、同様の性格を示す集落跡である。

なお、白子川流域一帯に岩鼻式土器が及んでいることを最初に紹介したのは、当時、埼玉大学2年生であった谷井 彪氏である（谷井1966）。本書23頁に実測図が掲載されているが（第7図2）、簾状文aを挟んで上下に幅広く波状文bを施した壺は午王山遺跡108号住出土壺（第151図1）に近似しており、岩鼻式2期新に位置づけられる（第233図7）。

② 午王山遺跡の後期前半 午王山遺跡における後期集落が形成されるのは岩鼻式2期からであり、岩鼻式1期が欠落している。岩鼻式1期の遺跡は、入間川水系に属し比企郡域を横断する都幾川流域に集中しており、岩鼻式土器生成後一時期において2期以降、周辺へ分布拡大していく状況が窺える。岩鼻式1期の時間的位置づけを示す地域間比較資料として、神奈川県大磯町／馬場台遺跡19地点17号住出土土器⁽³⁾をあげてみたい（第232図②）。第232図5の壺と6の高坏はかつて二之宮式と言われていたもので、ともに白岩式の系統を引く東遠江の菊川式最古段階に位置づけられる。9は折返し口縁をもつ三浦半島を中心に見られる久ヶ原式最古の甕であり、7・8は甲府盆地の中部高地型櫛描文土器で、形状に中期的様相を残し胴部には櫛描きによる縦羽状文が見られ、岩鼻式土器1期の甕と共通する。午王山遺跡では、こうした後期の最古段階は欠くものの程なくして後期集落が開始される。

岩鼻式2期古 午王山遺跡で岩鼻式土器が初現する遺構としては、1号住、72号住、97号住があげられる（第233図1～6）。3号住は既報告の小型壺に加えて破片資料が追加掲載されているが（第27図）、いずれも久ヶ原I式土器で岩鼻式が認められないが併行期と見られる。1号住は前稿（柿沼2009）では岩鼻式2期新としていたが、改めて出土壺（1）を熟覧したところ2期古とした方がよいと判断した。なで肩で胴部中央が張る器形、頸部櫛描簾状文と波状文はともにa類で乱れが少なく古相を留める。72号住出土鉢（3）は、折返し口縁の明確化が認められ、小型台付甕（第115図11）は宮ノ台式からの系統と見るよりは痕跡の浅いハケ整形や口唇部の内方からの刻みは岩鼻式の特徴で、頸部の櫛描簾状文や波状文が省かれた事例と考える。久ヶ原式が伴出しており（4・5・6）、沈線区画口縁部・多条帯羽状縄文壺（4）は古式の様相をもつが稚拙なツクリで最古期とする決め手に欠ける。

一段の輪積み痕を有する口唇部交互押捺・ナデ整形甕（6）も、口唇部交互押捺が不揃いで胴部の円形度が増している点などから、I式古としても最古期にはいかないと判断した。97号住出土甕（2）は受口状の名残を残すが、胴部に櫛描縦羽状文や斜格子状文がなく、頸部櫛描簾状文・波状文にやや乱れがある。

岩鼻式2期新 74号住・108号住・124号住・137号住出土土器を充てる（第233図7～17）。108号住では床直や貯蔵穴から出土した土器（7・8）のうち壺（7）はほぼ完形で、1に比して胴部の円形度が増し、折返し口縁に肥厚があり、頸部簾状文を挟んで上下に波状文bがある。74号住出土土器（9～12）は、簾状文を5条も重ねた甕（9）、折返し口縁で簾状文aを挟んで上下に波状文bがある甕（10）がある。伴った久ヶ原式壺（11）は頂点間がつまった新しい様相をもつ山形文で、伴出した輪積み痕1段のナデ甕（12）も含めて久ヶ原I式新と見たい。137号住出土土器（13～17）は久ヶ原式主体で、壺（15）は単口縁口辺部に沈線区画された羽状縄文帯をもつもので、下戸塚1期に位置づけられた下戸塚遺跡2号土坑出土壺（第235図5）より胴部の張りが強く後出と見られる。ナデ甕には輪積み痕が1段のもの（16）と多段のもの（17）があり、久ヶ原I式新とみたい。岩鼻式は破片のみで、13は頸部櫛描簾状文の上下に波状文があり7や10と同様である。

岩鼻式3期 81号住・105号住・141号住が該当するが、長方形状で主炉が奥壁寄りに偏在する18号住、住居の複合関係から最も古く隅丸長方形で炉が奥壁寄りの119号住も3期に属する可能性が高い。141号住出土土器（第233図19・20・21）は緩曲頸部に櫛描波状文だけの甕（20）、頸胴部帯縄文甕（19）は3期の特徴で、平底で輪積み痕1段のナデ甕（21）は岩鼻式3期が久ヶ原I式新併行に留まることを示している。81号住では点数は少ないが岩鼻式の無文甕（第233図22）が出土し、破片（23・24）は櫛描波状文で岩鼻式3期の特徴をよく示す。

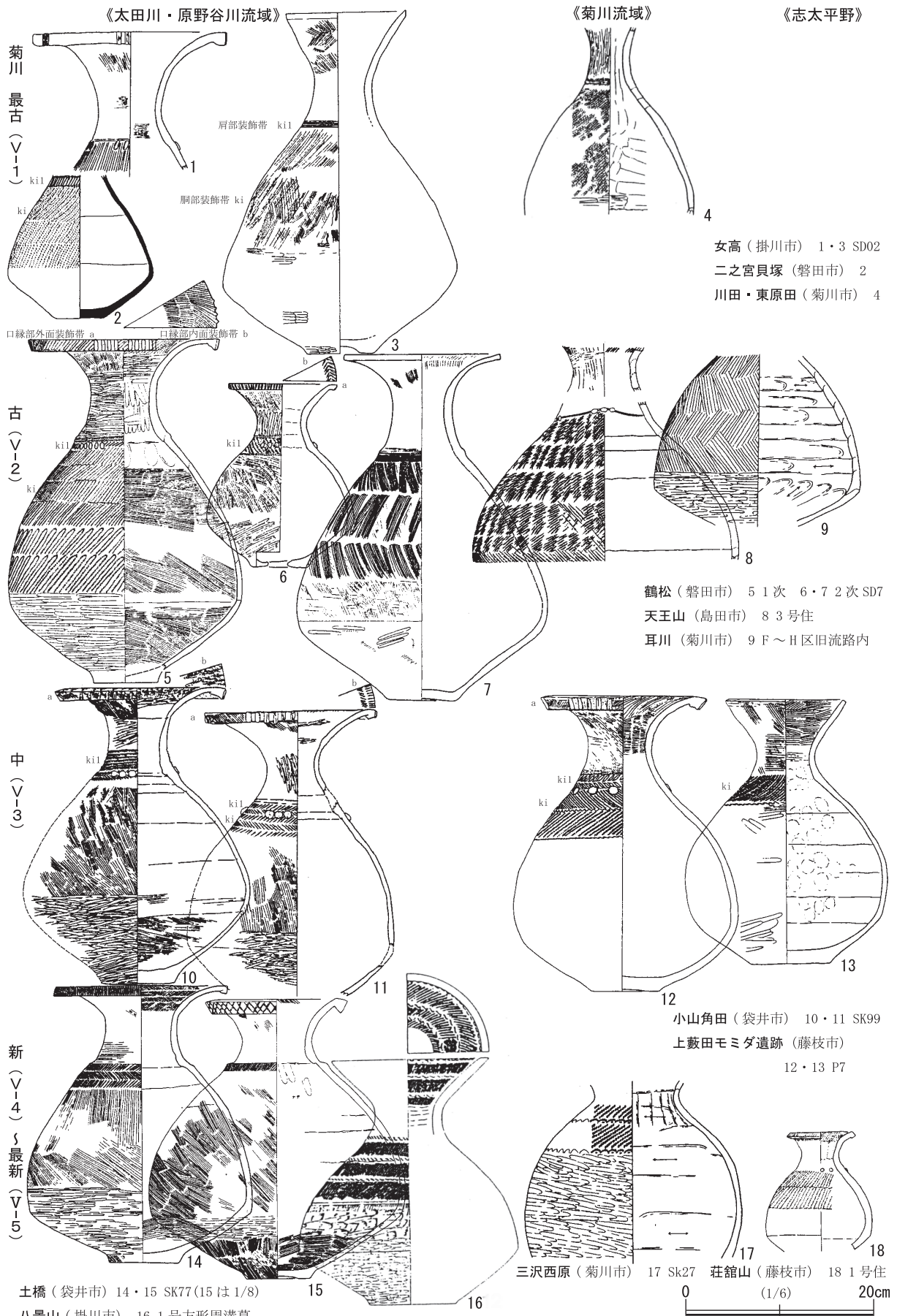
近隣の朝霞市／稻荷山・郷戸遺跡第8地点6号住出土の壺（第233図18）は頸部と胴部上半に2帯の櫛描波状文帯があり、単口縁で器面や口縁部内面は赤彩されている（照林・他2008）。この櫛描文帯が縄文に置換されれば吉ヶ谷式土器であり、岩鼻式3期でも新しく位置づけられる。同・第9地点1号住の甕（第245図15）は櫛描簾状文が健在だが、長胴な器形や口縁部の指のヨコナデは岩鼻式3期に特徴的である（斉藤純2010）。

岩鼻式3期をもって武蔵野台地北半から岩鼻式の系統を引くと考えられる土器は見当たらなくなり、在地化することなく痕跡も留めずに姿を消してしまう。

（3）第3段階

岩鼻式の撤退後、午王山に集落を形成するのは下戸塚式土器を使用する集団であり、久ヶ原式系土器（久ヶ原II式併行）が継続して混成する。下戸塚式は東海東部地方の菊川式土器に祖型があることは間違いなく、松本氏は武蔵野台地北部と菊川流域とは型式変化の軌道が一部共有され、持続的な交流関係が存在していたとしている（松本1996 pp. 622-623）。

① **菊川式土器** 菊川式土器の壺は無花果形の器形が特徴的で、細頸で肩の張らないものから胴部の張りが強くなるもの、頸部の屈曲が強くなるものに変遷する（第234図）。安藤広道氏は菊川式の壺に文様が施される文様帯を記号化し（安藤2009）、口縁部をI文様帯とし口唇面装飾帯（a）・内面装飾帯（b）、受口状口縁は受口部外面（A）・口唇（B）と区分する。

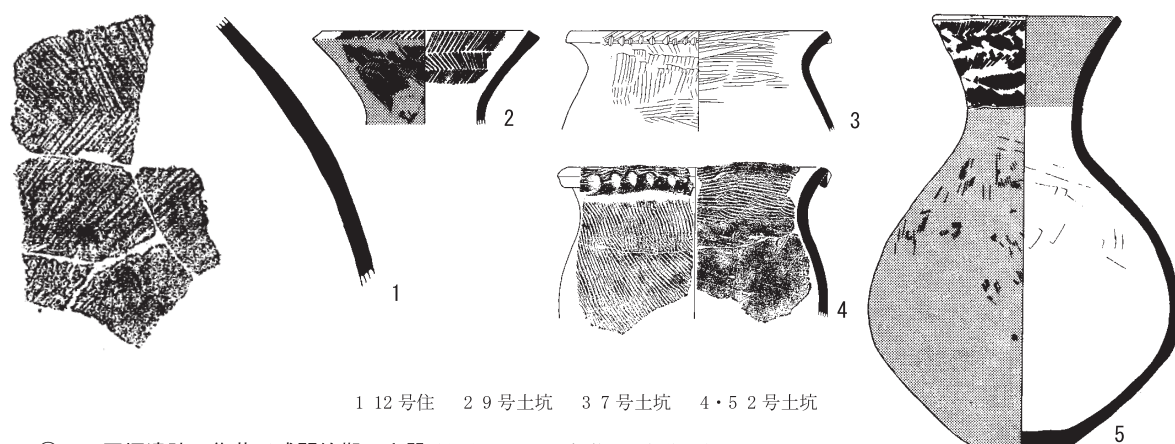


第234図 菊川式土器 壺の編年 (抄) (篠原 2000・2001・2002 をもとに作図)

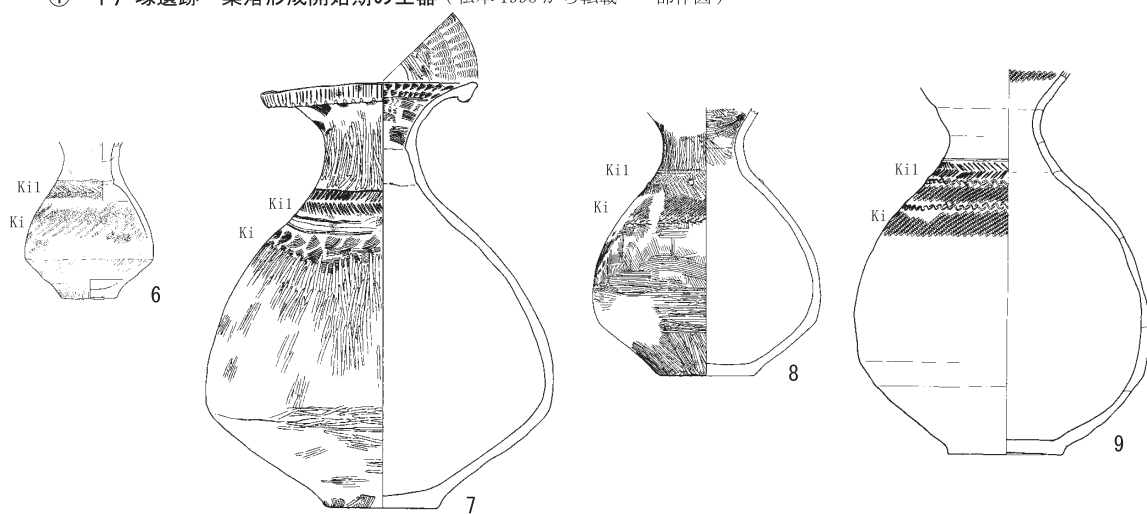
頸胴部のⅡ文様帯は一貫して肩部から始まるが、肩部装飾帯(Ki1)、胴部装飾帯(Ki)に分ける。複数個の浮文が付される場合があり、その位置はKi1とKiの境界である。

菊川式は3期(古・中・新)に大別され(中嶋1988)、その後5期(V-1・2・3・4・5)に区分されている(篠原・山下2000、篠原2002)。菊川式の文様帯をKi1とKiに分けた場合、最古・古段階(V1・2期)は細頸で文様が下膨れの胴部最大径付近まで広がり、Ki1にはハケ目沈線やハケ刺突等が、Kiには縄文や櫛描羽状文等が施される(第234図1~4、5・7~9)。古段階(V2期)からはKi1だけの個体(6)も存在する。中段階(V-3期)になるとKi1の羽状文が段数を増やして幅を広げるがKiの幅は狭くなり、Ⅱ文様帯は上方に集約される。東遠江から西駿河を中心に、下端に端末結節をもつ縄文が定着し重畳させるモミダ型(12)も現れる(篠原2001)。新・最新段階(V-4・5期)でも重畳端末結節文が主力だが文様帯の簡略化が進み、Ki1のみ、もしくはKi1、Kiの区別がなくなる。

② 下戸塚式土器 武蔵野台地を刻む神田川右岸にある下戸塚遺跡は1987年から1988年のほぼ1年間に亘って調査され、発掘調査報告書は1996年に刊行された(市毛・車崎・松本・他1996)。弥生時代後期の遺構は後期全般に亘り、出土土器を分析した松本 完氏は、そもそも在来土器と呼びうる土器が少なくハケ刺突文⁽⁴⁾の隆盛や器種構成において最も類似しているのは東遠江でも菊川流域の菊川式土器としている。そして、5期区分し氏自身の甕の変遷を基準とした南関東編年(松本1993)の「Ⅰ・Ⅱ期、Ⅲ期古・新段階、Ⅳ期」に対応できるとする。菊川式の編年(中嶋1988・1991)との関係については慎重ながらも、下戸塚1期が菊川式古段階の一部と併行し、3期にハケ刺突文が消滅し端末結節が出現することから菊川式中・新段階の境を3期においた。続く4・5期は菊川式新段階に対応させ、下限は器台・埴などが出現する以前とした。「下戸塚式」の名称は用いなかったが、下戸塚遺跡の菊川式系土器は全器種にまたがる移動事例として認められ菊川流域からの人的移動が関与するとし、その一方でハケ刺突文や壺の形態に菊川式とは異なる特徴があり、赤彩率が高い点などもあげた。その後「下戸塚式土器」を提唱した齋藤瑞穂氏は、松本氏の分析について「半世紀以上襲用されてきた型式もしくは様式が、不十分であったことを露わにするだけでなく、この分野の前提であった「南関東地方」という枠組みにさえも見直しを迫った」と評価した(齋藤瑞穂2010 p.54)。その上で齋藤氏は、下戸塚遺跡の環濠内部のエリア出土土器に菊川式土器の影響を認めつつ、ハケ刺突文や櫛描波状文の使用率や口内帯文様(安藤：口縁部内面装飾帯)は時期が新しくなるにつれて下がる点など、菊川式の要素と久ヶ原式の要素とが複合した独自色を備えたまとまりがあるとし、「下戸塚1式」を提唱した。氏は更に環濠外部エリア出土土器を「下戸塚2式」と命名した。対象とした壺の特徴は、幅広の文様帯を備え、口内帯をもつものはほとんどなく、2ないしは3段で構成される単節縄文帯を胴部上半にもち、最下段に鋸歯文や三角文など配している。直近では、古屋紀之氏が南武蔵北部地域の後期土器に「下戸塚式」の名称を与えることに賛同している(古屋2018)。筆者も齋藤氏の「下戸塚式」の提唱に賛同し、午王山遺跡の菊川式系土器にも充てたいが、その範疇は「下戸塚1式」である。確かに、「下戸塚式」は口縁部形状に大きく外湾するものや口内帯にハケ刺突を用いるものは少なく、Ki1だけ、あるいは、Kiだけの簡素な頸胴部文様が目立つ。篠原和大氏によれば東駿河では東遠江系統の土器が著しく変容した土器群がみられ



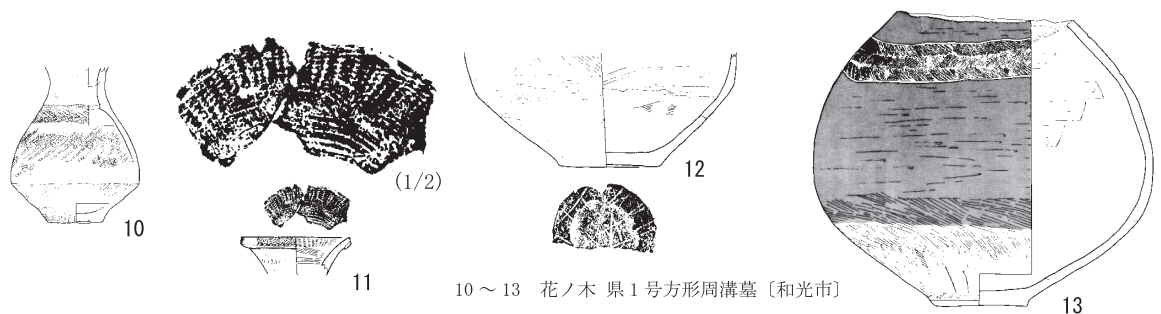
① 下戸塚遺跡 集落形成開始期の土器（松本 1996 から転載・一部作図）



古段階（V-2）6 花ノ木 県1号方形周溝墓〔和光市〕

中～新段階（V-3・4）7 西台1次小型住居跡〔板橋区〕8 西台後藤田Y43号住〔板橋区〕9 南通5号溝〔富士見市〕

② 菊川式土器の移動品又は忠実な模倣品（石坂 1994、小林理 1995、石川・藤波・他 1999、佐々木・小出・他 1984 から転載・付加）



10～13 花ノ木 県1号方形周溝墓〔和光市〕

③ 下戸塚式古期（石坂・他 1994 から転載・付加）

0 20cm

第235図 下戸塚式土器生成に関わる土器群

るというから、下戸塚2・3期以降は東駿河で変容した菊川式系土器との関係性を考える必要もある。これについては、後述する。そして、松本氏が下戸塚4期とした段階にも口唇がやや凹む内湾口縁や口内帯の縄文施文など菊川式の継続的な浸透が見られ、その系譜は複合口縁の拡張傾向や端末結節縄文主体の幅広一体型壺への収斂によって本郷弥生町出土の「弥生式土器第1号」に繋がっていく（安藤 2015a pp. 384-385）。「下戸塚2式」の分別の根拠とした2帯縄文帯や鋸歯文は久ヶ原式系要素が混交する後期前半からの系統で、後期後半以降にも武蔵野台地北部の二系統の混成という伝統が継承されたものであり、「弥生町式」の

主要な構成要素なのである⁽⁵⁾。従って、下戸塚2式を採ることは賛同しがたい。

次に、「下戸塚式」の開始時期についてである。松本氏は下戸塚遺跡の1期とした土器について菊川式古段階の一部と併行する可能性があるとしているが(松本1996 p.622)、「下戸塚式」の開始時期が後期初頭まで遡るとは言い切っていない。第235図①は下戸塚遺跡の環濠集落形成開始期の土器の一部で、12号住出土の壺大型破片(1)には胴部に数段のハケ羽状文が施されている。ハケ羽状文は最古段階(菊川式V-1様式)から古段階(菊川式V-2様式)まで認められ(第234図3・7・9)、肩部から胴下位の稜部付近まで占められる。単口縁の壺(第235図2)は口唇端部が明瞭に肥厚し、口唇面(a)と内面(b)をハケ刺突文で加飾する。ハケ甕(3)は口唇端部に明瞭な平坦面があり下方から刻みを入れるもので、折返し口縁の甕(4)も端面に粗いハケ調整を行う。以上は、菊川式に忠実な古式の様相をもつが、相模では菊川式最古段階(相伴土器との時間的位置づけも矛盾しない)の土器群(第232図②)が出土しており、それと比較しても下戸塚遺跡や周辺の遺跡ではV-1式(最古段階)のものは見いだせない。久ヶ原式の単口縁壺(第235図①5)は、口縁部に沈線区画された羽状縄文帯をもち赤彩されている。ただし、本類は久ヶ原Ⅱ式になっても残り、5が久ヶ原Ⅰ式だとしても最古段階までいくとは言い切れない。現時点では下戸塚式の初現は後期初頭には至らず、後期前半でも古段階に留めておくのが妥当と思われる。下戸塚式の主体(下戸塚1期から3期)は菊川式古段階(V-2様式)から中段階(V-3様式)にあり、一部は新段階(V-4様式)にかかる可能性があり、端末結節縄文が文様の主体となり胴部上半幅広一帯型が作出される「弥生町式」の直前までを充てることが妥当と考える。

次節では、午王山遺跡とその周辺域の下戸塚式土器について編年し、環濠集落の形成と廃絶にかかる時間軸の設定を行いたい。

3 午王山遺跡とその周辺域の下戸塚式土器

菊川式土器の遠来から下戸塚式土器の生成後、下戸塚式は主に武蔵野台地北方域の小河川沿いに拡大していく。出井川・蓮根川・前谷津川流域では板橋区／西台、西台後藤田、四葉地区などの遺跡があり、白子川・越戸川・黒目川流域では和光市／吹上、四ツ木、午王山、花ノ木、上之郷、朝霞市／稻荷山・郷戸、向山、中道・岡台などの遺跡があり、更に、富士見市／南通遺跡、東台遺跡など柳瀬川流域に達する。花ノ木、西台、西台後藤田、南通などの遺跡では、Ki1-Ki、a・bの基本構造が崩れていない菊川式の移動品ないしは忠実な模倣品と考えられる土器が出土している(第235図②)。これらは菊川式古段階から中～新段階のもので、後続して新・最新段階のものも確認できるから(中嶋1991、比田井1991、松本1991)、彼我との交流は継続的であり、変容し、文様は簡素化しても、東海系の要素は在地化して埋没してしまうことなく形式的な情報更新がなされ土師器形成へと繋がっていった。

午王山遺跡では住居跡の重複が激しく一括出土土器に良好なものが少なかったが、宮ノ台式と岩鼻式を除いた住居跡から比較的良好な資料を選別し、住居間の複合関係から新古を割り出した。更に、環濠がほぼ埋没した溝上部分に貼り床し構築した住居の土器群、環濠内で中層から上層にかけてまとまりのある土器群を対象に型式学的検討を行った。また、欠失している資料等を補うため近隣遺跡の資料も用いた。その結果、午王山遺跡とその周辺におけ

る下戸塚式土器の編年は、大きく古・中・新の3期区分が可能であった（下戸塚遺跡1・2・3期とは必ずしも合致させていない）。ただし、細分した同一時期住居間でも重複しているものがあり、時期を明らかにできない住居跡も少なくないから単一時期の同時存在を割り出すことは困難である。

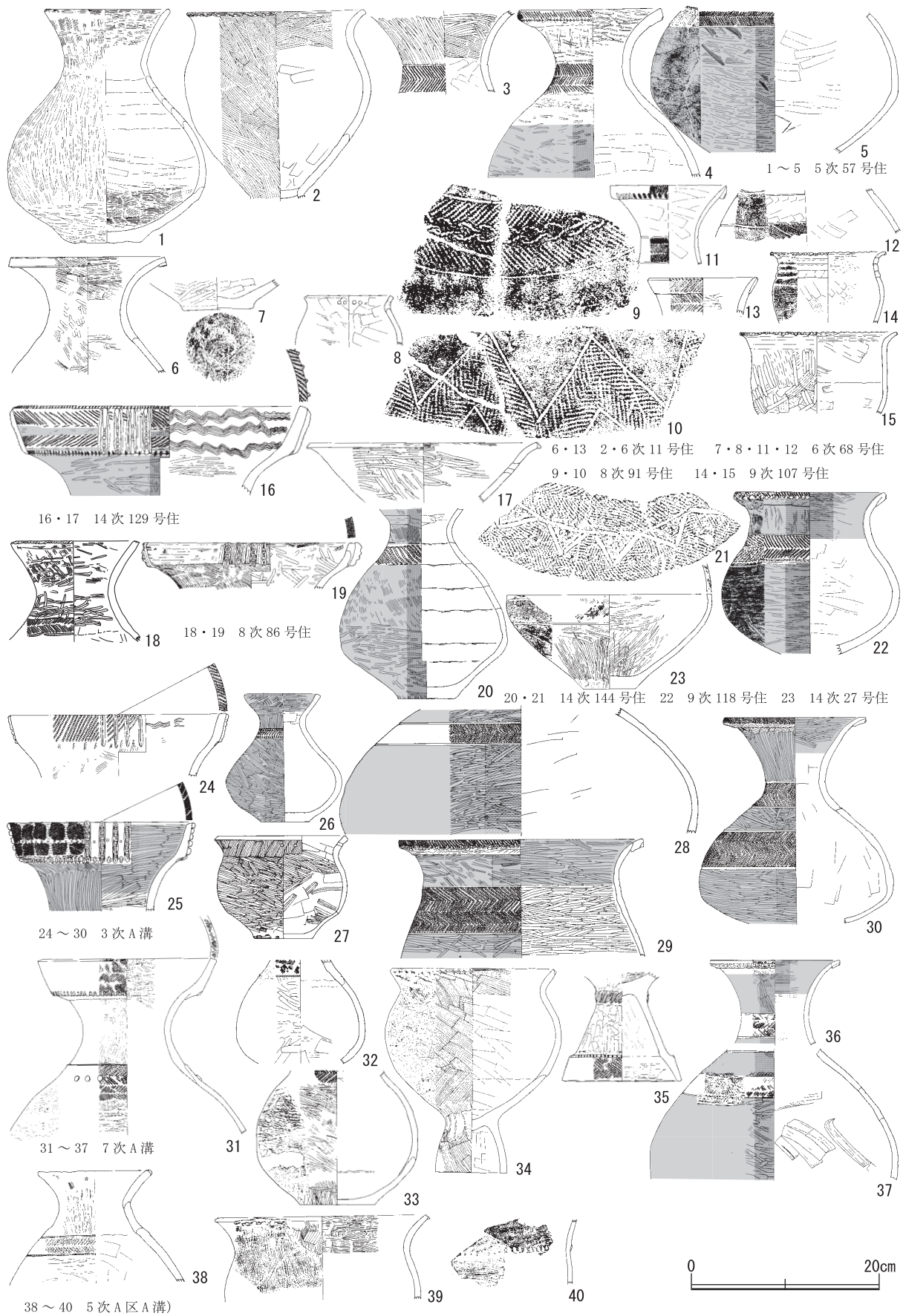
① **下戸塚式古期** 下戸塚式の北方への拡大による進出集落群のうち、現時点で最も古く遡るものは花ノ木遺跡（石坂・他1994）であり、午王山遺跡における環濠集落開始期以前である。花ノ木遺跡は環濠集落であるが、環濠外の第1号方形周溝墓から出土した土器が該当する（第235図③10～13）。10の小型壺は、胴部下位に稜をもち、ハケ目沈線とハケ刺突文でKi1を、稜付近まで幅広くLR縄文を施してKiを構成する（第237図1）。口縁部は不明であるが、頸胴部は成形・整形・施文において菊川式土器に忠実であり、菊川式古段階の様相を残す。11は小型壺の口縁部で口唇端部（a）に縄文、口内帯（b）にハケ刺突文を施す。ただし、この口縁部は大きく外湾しない点は忠実な模倣品とは言えず変容が見られる。12は壺下半部で、底面は中央が凹み外周に薄い粘土帯が巡る輪台風の底面で、菊川式の特徴を示す。13は久ヶ原式の壺で、肩部に羽状縄文帯を沈線区画した文様帯があり、器面は赤彩されている。おそらく頸部にも沈線区画羽状縄文帯がある2帯型の久ヶ原I式新期で、最初から菊川式系と久ヶ原式系の混成であることを示す。午王山遺跡では1期を欠いており、白子川・越戸川流域への進入時期が岩鼻式3期の集落存続期間中か撤退した直後かは不明だが、花ノ木遺跡開始期は岩鼻式3期／久ヶ原I式新期併行に収まると考えたい。

② **下戸塚式中期** 午王山遺跡の環濠集落造営期であり、住居は激しく重複する。土器からは中・古期と中・新期とに分けられ、環濠集落の形成は中・古期に開始される。しかし、環濠内出土土器でもA溝では中・古期に比定できる土器がまとまって出土する箇所（3次・7次A溝域と5次A区A溝域）がある。このことは、早い段階での埋没開始と溝中投棄が行われたことを示している。

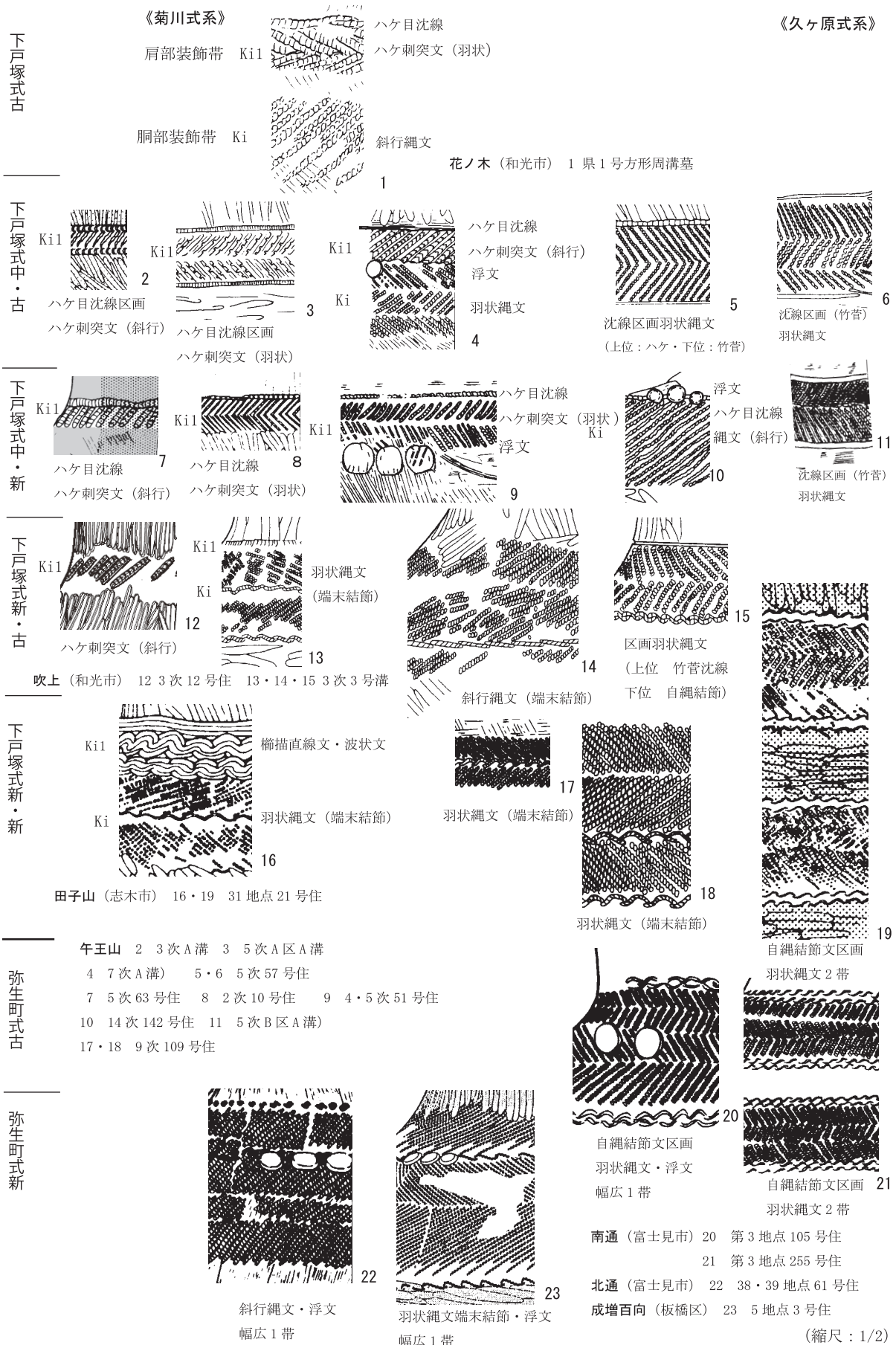
a. **中・古期** 器種は、壺・広口壺・無頸壺・甕・鉢・高坏からなる。先述の3次A溝、7次A溝、5次A区A溝出土資料にまとまりがあり、住居跡では11・24・57・68・86・91・107・118・129・144号住等の床直出土資料があげられる。近隣の吹上遺跡3次26号住出土土器（第239図②）は午王山遺跡の欠を補う良好なセット関係を示す（鈴木2003）。

壺 口縁部形態には、複合口縁、折返し状口縁、単口縁がある。

菊川式系の複合口縁は、複合部下端の突出は目立たず受口状の形態が保たれており、口縁部内面櫛描波状文が施されたもの（第236図16・24）が、午王山遺跡における初現期の特徴をよく示す。棒状浮文がない受口状幅広複合口縁（第236図31）は、その口縁部形状が菊川式古段階（V-2）に位置づけられている十二所遺跡出土土器（第239図1）に祖型が求められようか。31はⅡ文様帯が分かる数少ない事例でもあり（第237図4）、胴肩部に突帯の名残のような稜があつてⅡ文様帯の始点となり、ハケ刺突文のKi1とその下部のKiはRL-LR-RLの羽状縄文帯であり、中間点の円形浮文が両者を画する。このⅡ文様帯は第237図1に比し幅狭く胴肩部にまとまっているから菊川式中段階（V-3）以降であることは明らかで、下戸塚式中・古の時間的位置づけの目安となる。一方、幅広で棒状浮文が付されたものも菊川式に系譜があるようであるが、午王山遺跡の複合口縁部に羽状縄文が施されたも



第236図 午王山遺跡 下戸塚式中・古期の土器



第237図 午王山遺跡とその周辺域 下戸塚式から弥生町式の壺の頸胴部裝飾帯

の（第236図25、第239図①4）や無文のもの（第236図19）などは駿河の壺に特徴的な複合口縁（第239図2・3）との関係性も無視できない。菊川式系の底部形態は、輪台風の底面を有するものが古期から継承されている（第236図7）。

菊川式の折返し状口縁壺の口縁部形態は四角形状で大きく外湾し内外面を装飾するのが特徴で（第234図）、武蔵野台地北部でも西台遺跡1次小型住居跡出土壺（第235図7）に近い。しかし、午王山遺跡ではそのような事例が稀で、四角形状の口縁部を有する壺（第236図6）も大きく開くが外湾するとは言えず、口縁外面や口内帯に装飾がなくⅡ文様帯もない。単口縁の壺（第236図18）は口唇端部に平坦面を有しやや内傾して菊川式系の特徴を示すが、折返し状口縁壺と単口縁壺はⅡ文様帯がKi1のみでKiがないものがほとんどである。ハケ刺突文による斜行文は単斜と羽状をなすものがあるが、上下をハケ目沈線で区画されて独立した文様帯をなす（第236図26・32・38、第237図2・3）。Ki1のみで上下ハケ沈線区画されたものは菊川式にも早くからあり（第234図6）、省略とするよりは完結した文様とみるべきかもしれない。あるいは、後述する東駿河の菊川式系土器との関係性も考える必要があり、Ki1のみの構成を在地化と表現するだけで片付けるべきではない。

久ヶ原式系では、古期の花ノ木遺跡出土壺（第235図13）の系統を引く、一帯ないしは二帯の沈線区画羽状縄文帯を有する折返し状口縁赤彩壺の存在が目立つ。57号住（第236図5）、68号住（11・12）、3次A溝（28・30）、7次A溝の壺（36・37）などがあげられる。久ヶ原式系の壺でも山形文などが少ないのに比して沈線区画された帯縄文の卓越は、松本 完氏も指摘しており、久ヶ原式とは異なる在来の壺として「午王山式」と仮称することも一方法としている（松本2007 p.285・p.289 註21）。しかし、沈線区画帯縄文壺は岩鼻式に伴う久ヶ原式に系譜がある久ヶ原式系であることは確かであって、下戸塚式の構成要素として加えておきたい。また、少ないとは言え山形文を始めとする久ヶ原式は伴出しており、交差編年の目安になる。91号住出土の山形文片（第236図9・10）は横帯羽状縄文中に自縄結節文が2条施され、山形文は横帯文に近接し頂点間が狭まっており、総じて沈線は細くなっている。21は横帯縄文帯に接して上向き鋸歯文区画縄文帯からなっており、9・10・21の特徴は久ヶ原Ⅱ式古段階に位置づけられる文様構成である。

なお、羽状縄文帯壺でもその区画に、上位がハケ目沈線、下位が竹筥によるものがあり（第236図3、第237図5）があり、菊川式系と久ヶ原式系との折衷型と見られる。長めの原体による斜行縄文で端末結節のない壺（第236図20）は、菊川式系であろうが、赤彩されている。赤彩は、久ヶ原式系は高坏・鉢も含めて総じて施されているが、菊川式系でも16・25・26は赤彩されており、下戸塚遺跡では赤彩率が高いとする松本 完氏の指摘（松本1996 p.623）が午王山遺跡でも当てはまる。

甕 ハケ台付甕が主流を占めるようになるのが、菊川式系の進出による最も大きな変化である。台付甕は口縁部が屈曲度のある頸部から短く開き胴部最大径がやや上方にある形状で、口唇端部をハケ整形具で面取し下方から刻みを入れるのが特徴である（第236図2・34）。その一方で、久ヶ原式系のナデ甕も伴い（第236図14・15・40）、後続していく。14は輪積み痕を明瞭に残すが、胴部にハケ整形が垣間見え、15はナデ整形とヘラミガキだが、輪積み痕は痕跡化し器形も口縁部に最大径があり胴部が張らない。40は一段の輪積み痕上に刻

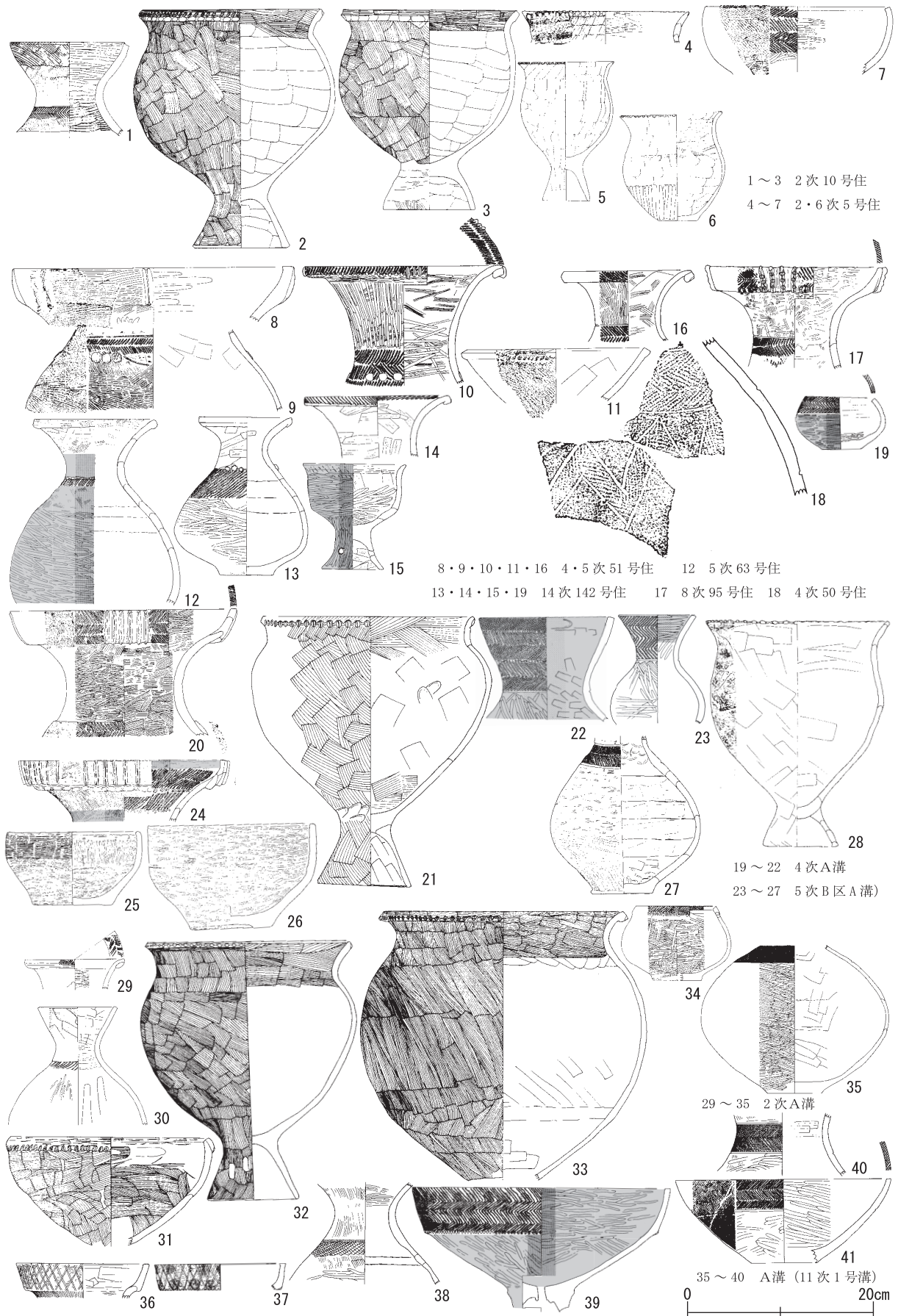
みを施す甕で、輪積み部はナデ甕だが胴部にハケ整形痕が見られる。

広口壺・無頸壺・鉢・高坏 いずれも菊川式系と久ヶ原式系の両者がある。菊川式系の広口壺・無頸壺（第236図8・27）は、いずれもハケ整形痕を残す無文土器で赤彩されない。鉢（第239図16）は口辺部と体部間に稜を有し、内外ともにヘラミガキされている。高坏は良好な資料は少ないが、坏部だけの17は外方に開くが菊川式のように鰐状にはなりきれていない。一方、脚部（35）は菊川式に忠実で、接合部の薄い突帯にハケ刺突で刻みを施し、裾は鍵状に開き羽状縄文を施す。久ヶ原式系は精製土器で、折返し口縁部に縄文施文し刻みが入り、頸胴部に一帯の沈線区画羽状縄文帯が配され赤彩された広口壺（第236図22）、27号住出土の鉢（第236図23）も口縁部に沈線区画の羽状縄文帯がある。9号住出土高坏破片（第30図⑥）もそうで、吹上遺跡3次41号住出土高坏（第240図4）が坏部の形状が分かる事例であり、壺と同様に、沈線区画羽状縄文帯の存在が際立つ。

b. 中・新期 環濠では、第2次A溝東側、第4次A溝・第5次B区A溝・11次A溝出土土器が中・古期よりも新しい様相でまとまっており、環濠埋没が進んだ時期は中・新期のようなのである。そして、西側（4次、5次B区）ではA・B溝上に住居も構築されるようになる。A・B溝上に構築された30・50・51・52・63号住出土土器や、複合関係で新しく位置づけられる住居跡出土土器であっても菊川式系の要素を色濃く残す5・10・95・142号住居跡等出土土器を該当させた（第238図）。

壺 複合口縁壺は内湾度が強まるが、下端への突出はまだ見られず、肩部の稜が残るもの（第238図20）や、棒状浮文をもたない中型複合口縁壺には竹管斜格子目文があり（36・37）、37には円形朱文がある。竹管斜格子目文は菊川式V-3・4期（第234図15）にあり、その採用には新たな関係性継続が窺える。折返し状口縁は口縁端部の面取が残り（12・13・14・29）、やや丸みが増しているとはいえ下部に重心がある形状は健在である（13）。折返し状口縁の口内帯にはハケ刺突文はほとんど見られず、あっても斜行縄文（14）や羽状縄文（29）である。単口縁（1・30）は、口唇端部に平坦面をもつ点は変わらないが、明瞭に内湾するか（1）、内湾気味（30）である。文様はKi1だけでKiが省略された簡素なものとなり、1・12（第237図7）・30・38はハケ目沈線の上位区画と刺突による斜行文であり、第237図8は羽状文である。第238図9（第237図9）はKi1とKiの境界となるべき部分に円形浮文が配されているが、Kiが省略されたため結果としての最下端の位置となっている。一方、13（第237図10）はKi1が省略されKiが長い原体の斜行縄文帯を構成するもので、ハケ目沈線と円形浮文は最上位にある。中・古期がKi1だけでもあっても上下を沈線区画して完結した文様帯が多いのに対し、中・新期が省略したままのものが多く点に新旧関係を考えたい。10は口内帯に原体の短い斜行縄文で頸胴部の羽状縄文も同様に駿河系と見られ、菊川式系でも東駿河の菊川式系の新たな波及があったことや、13が出土した午王山142号住では変形ながらワイングラス型高坏が伴出しており（第238図15）、新期以降出土事例が増える西遠江以西との交流拡大も視野に入れる必要がある。

久ヶ原式系の壺は良好な資料はないが、沈線区画された帯縄文壺には複合口縁壺（第238図17）がある。本来、久ヶ原式の壺は折返し口縁が基本であり16がそうであるが、複合口縁の採用は、その形態が菊川式系と同様の受け口状口縁部形態であることから両者の融合と



第238図 午王山遺跡 下戸塚式中・新期の土器

も取れる。16・17・40は頸部文様帯の位置から二帯型になる可能性があり、中・古段階から継続して存在感がある。一帯型の事例としては27(第237図11)や35がある。大型破片(18)は沈線区画横帯縄文帯の下部山形文は形が崩れ幅も狭く単斜方向(LR)であり、同様の特征をもつ久ヶ原式を安藤編年では久ヶ原Ⅱ式古段階に留めている。しかし、第236図9・10よりは新しいことは間違いなく、本稿では久ヶ原2式新段階としておく。単口縁で口辺部に下部を沈線区画する羽状縄文帯を有する壺(22・23)は、久ヶ原1式(第233図15)からの系統であるが、口縁部が内湾している22は、先述の菊川式系の壺(1)と同調した新しい要素である。

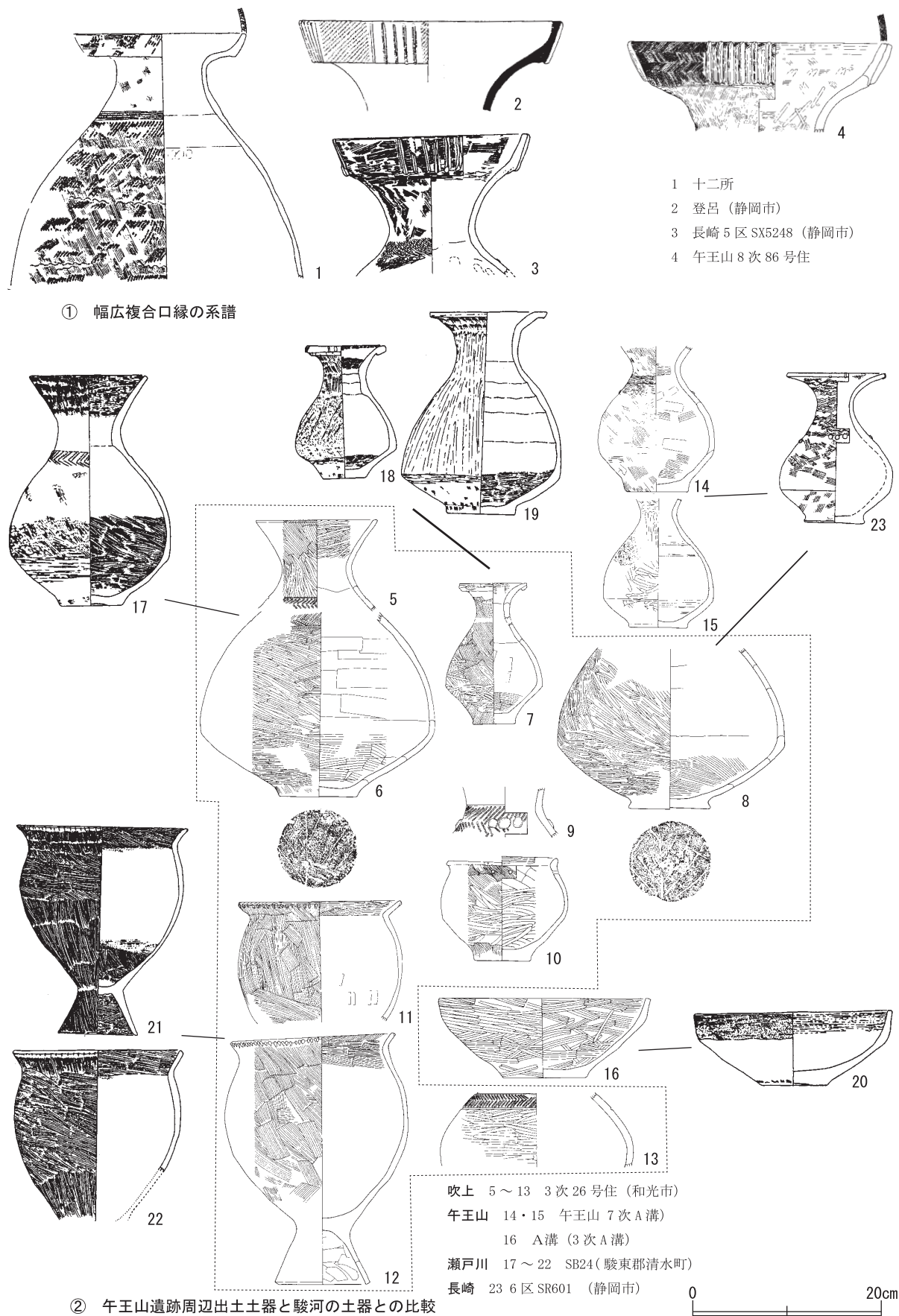
甕 ハケ台付甕(第238図2・3・21・32・33)は、口唇部にハケ整形具による面取があり下方から刻みを加える技法は継承され、2・33の折返し段があるような口縁部は東遠江東部からの交流継続を示す資料である。中・古期に比して頸部の反りがやや曲線化し、胴肩部の張りや胴部中位の円形度が増すのが新しい要素である。ナデ甕は台付甕(5・28)と平底(6)があるが、台付甕は輪積み痕が見られず、平底には一段の輪積み痕跡が残っている。

広口壺・無頸壺・鉢・高坏 菊川式系と久ヶ原式系との組み合わせからなるが、菊川式系は粗製の鉢・高坏、久ヶ原式系は装飾性があり赤彩された精製の無頸壺・鉢・高坏である点は、中・古期から継続する。

粗製鉢(第238図25・26)は、いずれも体部下半との境に稜をもち、底面は周囲に薄い粘土帯があり中央部が凹んでいるものが多い。菊川式の鉢に忠実であり、相互交流の継続更新が確認できる。ハケ整形痕を明瞭に残す高坏には二種があり、鉢状の坏部を有し口唇端部へのハケ整形具による面取・下方からの刻みを有するもの(11)と折返し口縁で下端に刻みを有し内湾し深みがあるもの(31)とがある。前者は、菊川式系甕の口縁部とツクリが同一である。久ヶ原式系はいずれも口縁部・口辺部に縄文帯を有するもので、無頸壺(第238図34)は折返し口縁で下端に刻みを有し、小型無頸壺(19)は単口縁で羽状縄文帯の下位を沈線区画している。鉢(41)は単口縁が開き、羽状縄文帯の下位が沈線区画される。沈線区画横帯縄文は壺と同様に顕著である。11次A溝出土の高坏(39)は薄く幅広の粘土帯を貼付して口縁部とし、羽状縄文を施し下位に刻みを施している。縄文帯には円形朱文の点列を3列配している。11次A溝には、先述したように複合口縁壺(37)にも円形朱文が施されているものもあり中・古期には確認できないから、その採用は中・新期の可能性がある。

c. 下戸塚式中期と駿河との関係性 先に午王山遺跡の複合口縁壺の口縁部形態や羽状縄文施文・棒状浮文について駿河との関係性について触れたが、午王山遺跡7次A溝からは登呂式土器の小型壺が2点(第239図②14・15)出土している。和光市/吹上遺跡3次26号住出土土器群(第239図②5～13)は、東駿河の菊川式系土器群と対比してみると共通する点が少なくない。3次26号住は、菊川式系のハケ整形痕が明瞭な無頸壺(10)に久ヶ原式系の沈線区画羽状縄文帯壺(13)が伴い、下戸塚式中・古期に位置づけられる。

篠原和大氏によれば、東駿河でも黄瀬川扇状地に位置する瀬戸川遺跡では、東遠江系統の著しく変容した土器群がみられるという(篠原2002 p.692)。吹上3次26号住出土の壺(5)は、Ki1(ハケ目沈線・ハケ刺突羽状文)のみの瀬戸川SB24出土の単口縁壺(17)に、吹上3次26号住出土の小形壺(7)は折返し口縁でハケ整形だけの簡素な小型壺(18)に近い。



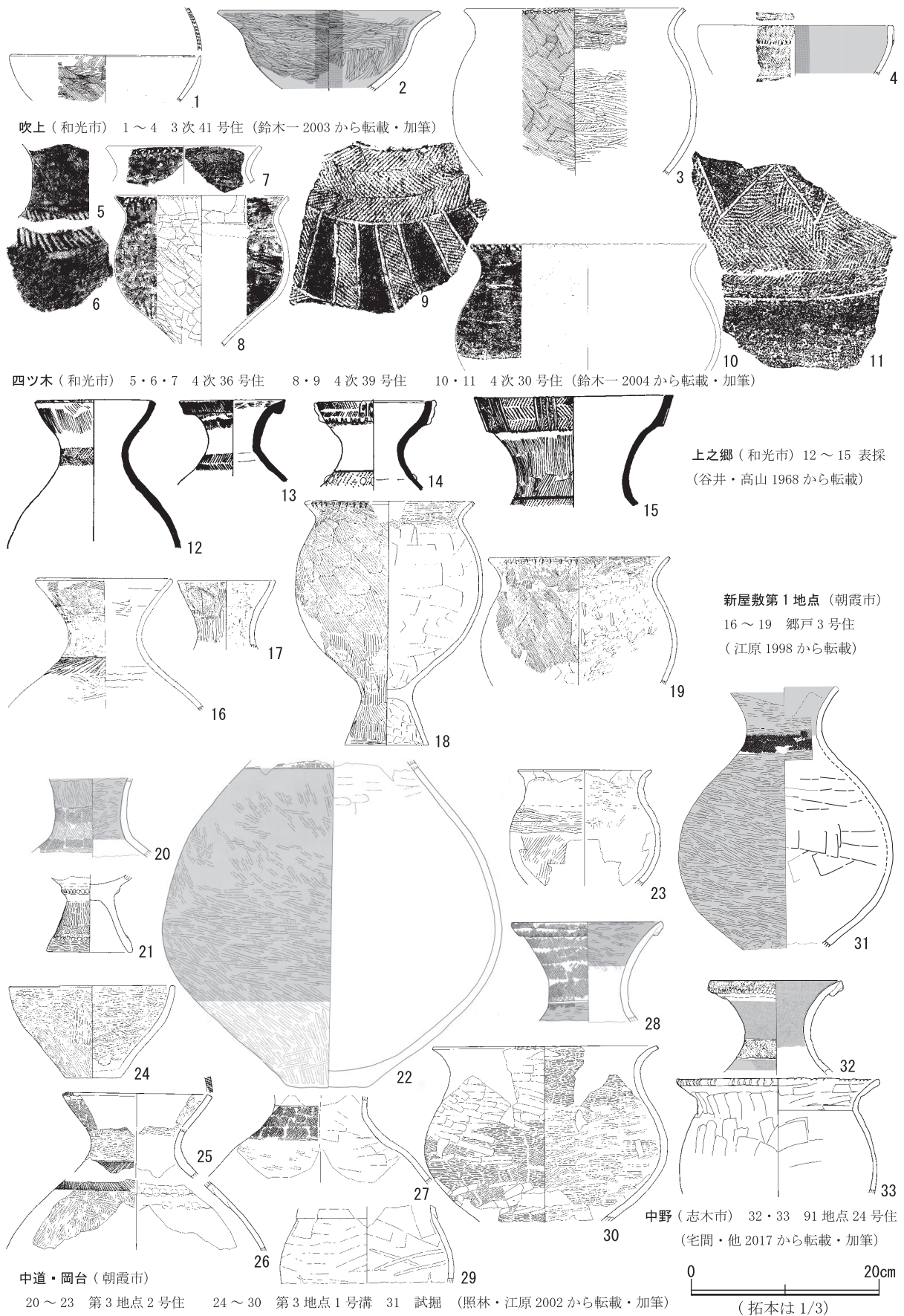
第239図 下戸塚式中・古期の土器と駿河の土器との比較（鈴木一 2003、篠原・山下 2000 から転載・作図）

大型壺（8）の裾が突き出た底部形態も駿河に特徴的で、その底面形態はハケ羽状刺突をハケ目沈線で区画した大型壺（6）と同様の輪台風である。菊川式系ハケ台付甕（11・12）の屈曲頸部から短く外反し、最大径が上位にある胴部形態も、瀬戸川遺跡の台付甕（21・22）に近似する。因みに、午王山3次A溝出土の浅鉢（第239図16）は口縁部が直立する瀬戸川遺跡の鉢（20）に近い。武蔵野台地の下戸塚式中段階以降の大きく外湾しない折返し状口縁や簡素化された装飾帯をもつ菊川式系土器は、東駿河の変容した土器群からもたらされた可能性があり、菊川式系と言ってもその発信地の特定が今後検討課題になってこよう。

d. 周辺の下戸塚式中期の土器 午王山遺跡近隣において、下戸塚式中期の遺跡が近年の調査によって増加しつつある（第240図）。下戸塚式が容認されるためには、その広がり把握される必要があるが、弥生時代後期の白子川周辺の土器に東海東部地方の影響が濃厚な点を最初に指摘したのは、谷井 彪氏と高山清司氏である。両氏は、昭和40年代の前半に和光市内（旧・大和町）の宅地造成や農地転用などで出土した土器を実測・報告し（谷井・高山1968）、上之郷遺跡や午王山遺跡の出土土器を紹介した。後者については、本書でも再実測したものが掲載されており（23頁第7図）、ここでは上之郷遺跡の一部を再録する（第240図12～15）。12・13は頸胴部の装飾にハケ刺突羽状文を施しているもので、いずれも上位のみをハケ目沈線で区画している。12は単口縁壺で内湾し口唇部に平坦面がある。複合口縁壺（15）は複合部が下位に突出しない受け口状であり、頸部縄文帯は沈線区画である。以上の諸特徴から、下戸塚式中・新期に位置づけられる。上之郷遺跡は越戸川流域にあり、花ノ木遺跡を調査・報告した石坂俊郎氏によって花ノ木遺跡と一体の環濠集落と解釈されている。花ノ木遺跡の環濠集落は下戸塚式古期から中期に（あるいは新期にまで）継続しているようであり、石坂氏による土器の分析もある（石坂・他1994）。また、篠原和大氏も第1号環濠資料を検討しているので（篠原2009）、それらに譲りたい。以下は、現時点における下戸塚式中期の北限域を示す土器群を、南から白子川、越戸川、黒目川、柳瀬川流域の順に紹介する。

白子川左岸の環濠集落である和光市／吹上遺跡3次26号住出土土器（第239図②5～13）が下戸塚式中・古期の良好な事例であることは先述したが、3次41号住出土土器（第240図1～4）は26号住にはない高坏がまとまっている。いずれも脚部を欠くが、ハケ整形で口唇部にハケ刺突の刻みがある粗製高坏（1）とヘラミガキと赤彩の精製高坏（2）は駿河も含めた東海東部系で（変形しているが）、久ヶ原Ⅱ式古の高坏（4）が伴う。10は、口唇端部が面取され下方からの刻みがある菊川式系ハケ甕である。下戸塚式中・古期に位置づけたい。

和光市／四ツ木遺跡は越戸川流域にあり、4次30号住出土の甕（10）は口唇部交互押捺で輪積み痕が全く見られないナデ甕だが、久ヶ原Ⅱ式古の壺大型破片（11）が伴っている（鈴木一2004）。36号住では上位のみのハケ目沈線区画でハケ刺突羽状文の壺破片（5・6）に口唇端面を整形し下方から刺突する菊川式系のハケ甕（7）が伴っており、下戸塚式中・新期と見る。39号住ではハケ甕（8）に縦区画文壺（9）が出土している。縦区画文壺は古屋紀之氏が仮称田端道灌山式として狭義の弥生町式と対比させているが（古屋2018）、本例は久ヶ原Ⅱ式併行であり、それ以前と見られる。縦区画文壺の位置づけについては、系統



第240図 近隣遺跡の下戸塚式中期ないしは併行期の土器

関係とその広がり、あるいは下戸塚式との関係性把握にもう少し時間をかける必要がある。四ツ木遺跡の下戸塚式は、中・古期から中・新期にまたがると見ておきたい。

朝霞市 / 新屋敷遺跡第1地点（郷戸遺跡）は越戸川左岸にあつて、右岸側の上之郷遺跡に対峙する。1968年に発掘調査された3号住出土土器が、江原 順氏によって再検討されている（江原 1998）。16は壺で、ハケ目沈線下にハケ刺突斜行文が巡る Ki1 だけの構成である。17は口唇部が面取される内湾気味の口縁部であり、17と同様の肩部装飾帯があつてもおかしくはない。18・19の台付ハケ甕は口唇端部の面取と下方からの刻みが観察できるが、胴部の円形度が増して最大径が中位に移行している。下戸塚式中・新期に位置づけたい。

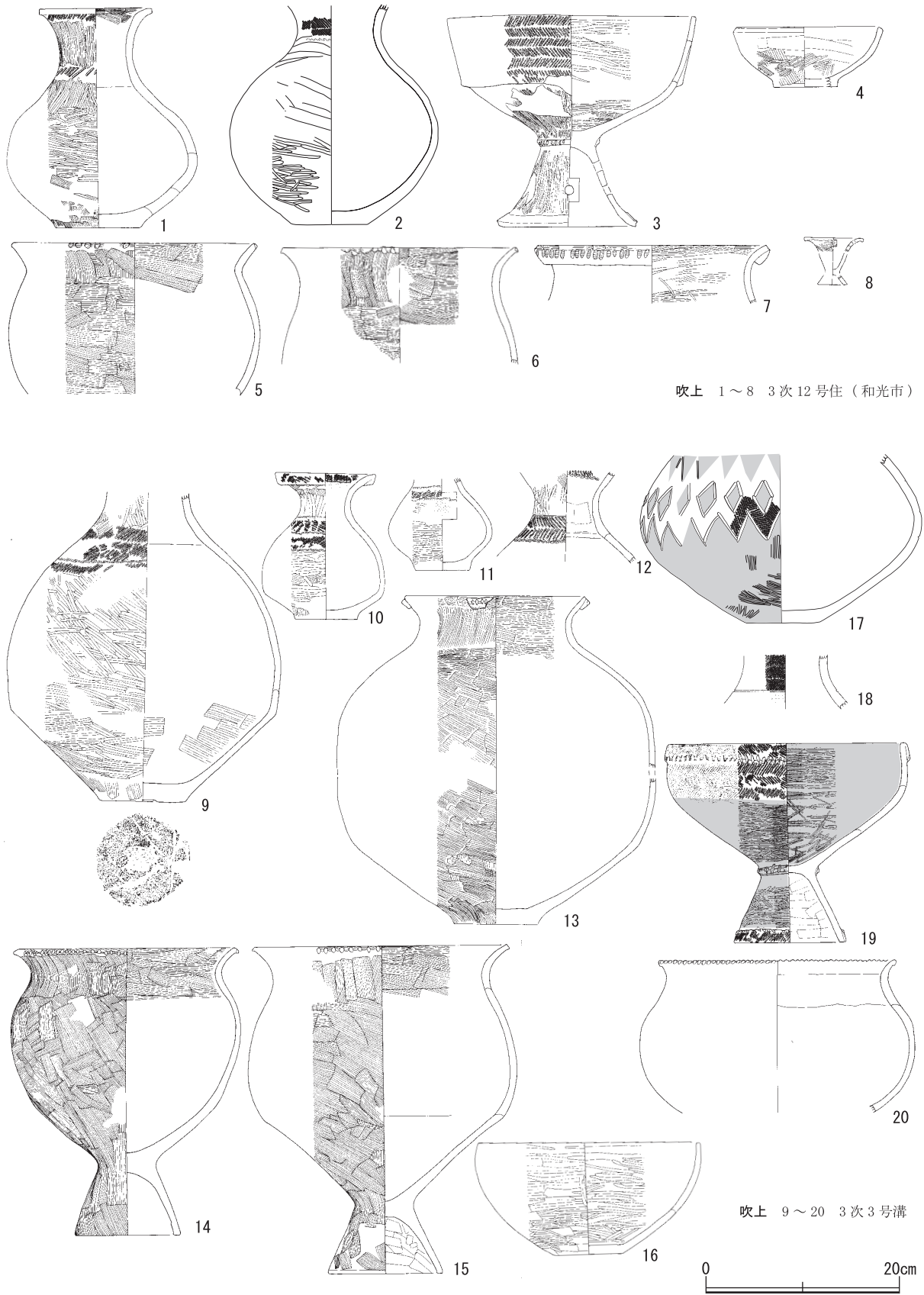
朝霞市 / 中道・岡台遺跡は黒目川右岸の環濠集落で（照林・江原・他 2012）、部分的にしか調査されていないが第3地点2号住、1号溝（環濠）、試掘地点（方形周溝墓）が菊川式系と久ヶ原式系からなっている（20～31）。菊川式系では、羽状縄文帯がハケ目沈線で区画されている壺（20）、平縁で口唇部にハケ刺突の刻みがある内湾気味口縁でハケ刺突羽状文の上位をハケ目沈線で区画する壺（25・26）と鉢（24）が菊川式系で、ハケ整形痕が明瞭な高坏脚部（21）もその可能性がある。久ヶ原式系は一带型沈線区画羽状縄文壺が目立っており（22・27・31）、22・31は赤彩されている。甕は、輪積み痕跡を残すもの（23）や残さないもの（30）も胴部のハケ整形痕が明瞭である。輪積み痕が1段残る甕（29）はナデ甕だが、午王山5号住出土甕（第238図6）のような平底かもしれない。2号住は下戸塚中・古期、1号溝は中・新期だが23のような古い様相をもつものも混じているようである。

志木市 / 中野遺跡は柳瀬川右岸にあるが（宅間・他 2017）、91地点21号住から久ヶ原Ⅱ式の壺（32）が出土している。分厚い折返し状口縁で、頸部に沈線区画羽状縄文帯があり、赤彩されている。伴出したハケ甕（33）は口縁部のツクリが菊川式系とは言い切れない。現時点では、下戸塚式中期の菊川式系土器は柳瀬川流域では希薄であり、広がるのは次期まで待たねばならないとすれば、黒目川が下戸塚式中期における北限となるかもしれない。

④ **下戸塚式新期** 壺における端末結節文の盛行をもって画期とするもので、ハケ刺突やハケ目沈線が残る古期とそれがなくなる新期とに分けられる。環濠埋没後の新期には、数軒の小集落が営まれていたようであり、新・新期をもって午王山遺跡における弥生時代の集落造営は終焉を迎える。

a. **新・古期** 午王山遺跡では良好な資料に乏しいので、和光市 / 吹上遺跡3次12号住、3次3号溝出土土器（鈴木 2003）などを用いて記述する（第241図）。

壺 ハケ刺突文やハケ目沈線が残るが、簡略化がより進み端末結節文の存在感が顕著である。第241図1はハケ刺突斜行文を巡らただけであり（第237図12）、11はハケ刺突斜行文を上下ハケ目沈線で区画しているが、いずれも乱れが顕著である。10は上位ハケ目沈線に端末結節羽状縄文（第237図13）、2はハケ目沈線がなく斜行縄文の端末結節、9もハケ目沈線がなく斜行縄文の端末結節で幅広横位縄文帯（第237図14）を構成する。9は下半部に稜があり、底面中央が凹む特徴は継承している。篠原和大氏は長い縄文原体と端末結節文を特徴とする菊川式をモミダ型と呼称しており（篠原 2001）、標識となる藤枝市 / 上藪田モミダ遺跡は志太平野にあつて駿河に属する。Ki1とKiを保持するもの（第234図12）に忠実な土器は、武蔵野台地東北縁一帯では板橋区 / 西台後藤田遺跡Y43号住（第235図8）や



（鈴木一 2003 から転載・一部加筆）

第241図 下戸塚式新・古期の土器

富士見市 / 南通5号溝（第235図9）で出土しており、第241図9はKiだけの第234図13に忠実であると言える。駿河以東の菊川式系の波状的な流入がこの段階でもあったことが確認でき、南通5号溝出土事例はその北限が柳瀬川流域にまで及んだことを示す。

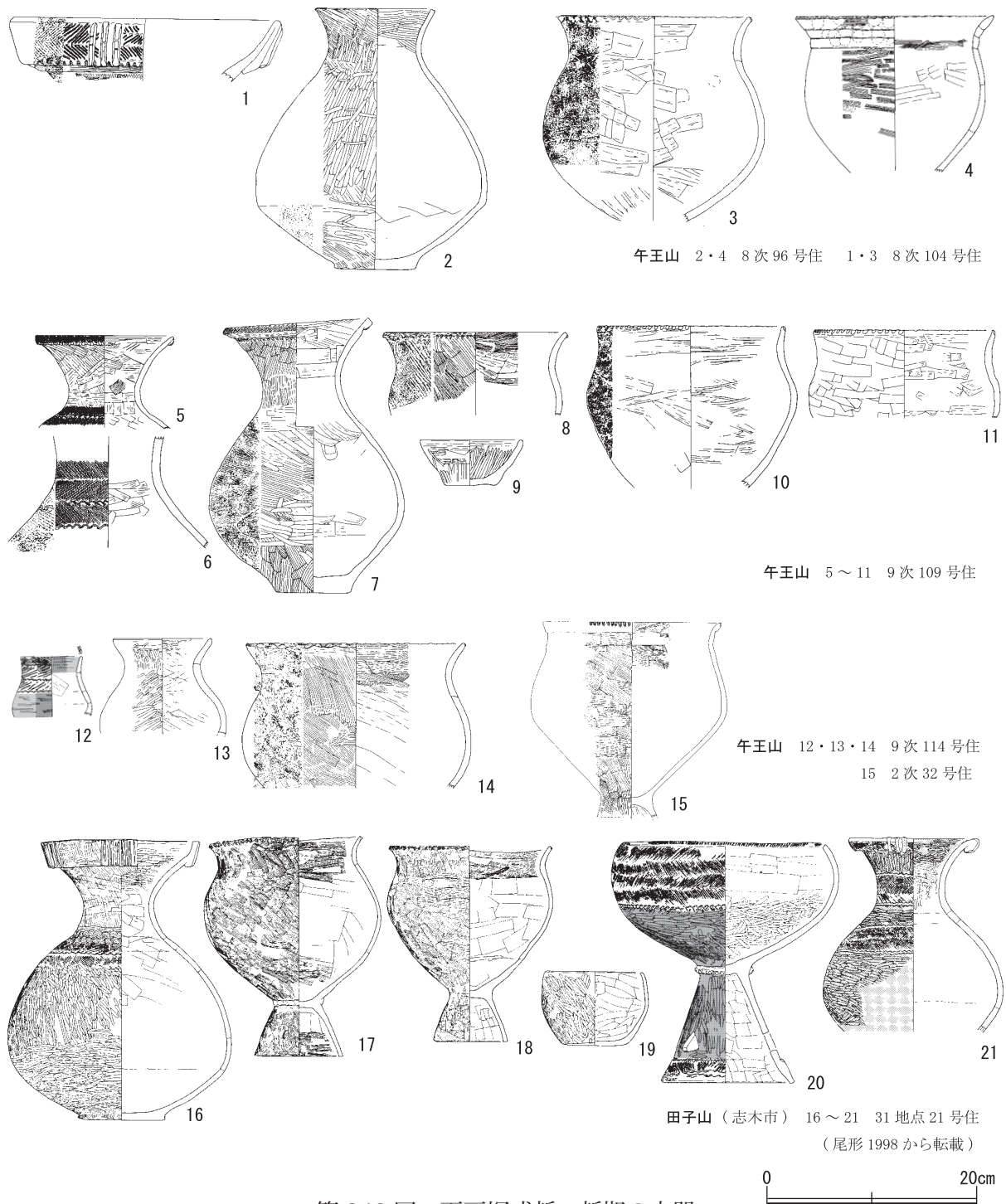
久ヶ原式系の壺は数少なくなるが、吹上遺跡3次3号溝からモミダ型壺とともに出土した第241図17は、山形文が重なって菱形になった幾何学文で構成され、赤彩されている。更に複雑化する久ヶ原Ⅲ式以前の久ヶ原Ⅱ式新に位置づけられる。富士見市 / 東台遺跡3号方形周溝墓では、自縄結節文区画羽状縄文帯とその下位に沈線区画山形文をもち赤彩された久ヶ原Ⅱ式の壺（第243図②12）と菊川式系壺（10・11）が伴出しており、10はモミダ型壺である（堀2005）。二帯の自縄結節文区画羽状縄文帯壺は武蔵野台地東北端地域では初現であり、この土器を再評価した小出輝雄氏は、久ヶ原式の土器（12）とモミダ型壺（10）の共伴から後期中頃以降、弥生町式以前に位置づけた（小出2006）。12の複合口縁は棒状浮文が2条と少なく幅も狭い未発達なものだが、久ヶ原式には本来複合口縁はないから変形品と言える。胴部山形文は頂点間が詰まって形が崩れており、小出氏は多少上下に押しつぶされたような器形や沈線も細いこともあげており、久ヶ原Ⅱ式新に位置づけておきたい⁽⁶⁾。この土器は、吹上遺跡3次12号住出土壺（第244図13）に系統的に繋がるものである。モミダ型とした吹上遺跡3次3号溝出土壺（第241図9）や東台遺跡3号方形周溝墓出土壺（第243図②12）は口縁部を欠失しているが、口縁部形態が分かる資料として新宿区 / 落合遺跡5～7次SI32出土壺（第243図③13）がある。厚みのある折返し状口縁で外方に開き、口内帯に端末結節斜行縄文が施されており東海東部系の要素が色濃い。

甕 折返し状口縁の甕（第241図7・13）は口縁部形状や肩が張る器形に東遠江の要素が色濃く見られ、モミダ型壺とともに東海東部からの新たな波状的な影響があったことが分かり、台付甕も14・15のように口縁端部の面取を残すものは継承されている。その一方で、5・6や午王山62号住出土甕（第243図3）のように端部に交互押捺が用いられるなど口縁端部形成の規格性が薄れ、頸胴部の緩曲化や肩部の張りもなくなってくる。ナデ甕（20）も細かな擦痕が入り、実測図によってはハケ甕ともナデ甕とも取れる甕が目立つようになるのもこの段階以降という（松本2007 p.282）。

鉢・高坏 鉢は明確に菊川式系と言いうる特徴を示すものはなくなる。吹上遺跡3次3号溝出土高坏（19）は久ヶ原式系で、同・41号住出土高坏（第240図4）の系譜を引くが、折返し口縁部から体部にかけての縄文帯下部の沈線区画がなくなっている。高坏では西遠江以西の要素が部分的に組み込まれるものがみられるようになり、第241図3は、坏部に幅広の粘土帯を貼付して羽状縄文帯とし、坏部と脚部の境に刻み突帯がつくが、円形の透かしや開く裾部の粘土貼付は西遠江の要素である。和光市 / 城山遺跡1号住出土高坏（第243図①9）も脚部に透かし孔があり、午王山遺跡62号住では西遠江以西そのものあるいは忠実に模倣した高坏が伴う（第243図①5）。交差編年上の良好な資料であり、後述する。

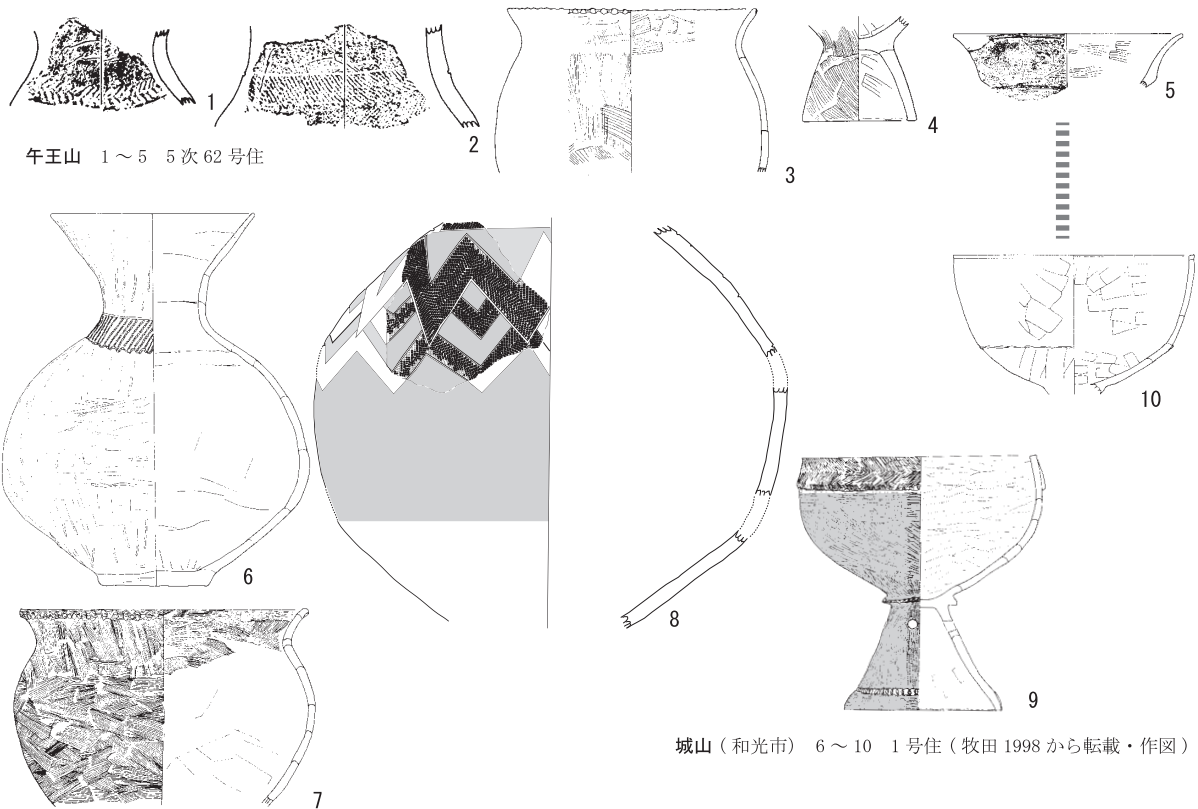
b. 新・新期 弥生時代における午王山遺跡の集落終焉期（第242図1～15）であるが、志木市 / 田子山遺跡21号住一括資料（16～21）で補う（尾形1998）。

壺 この段階にはハケ刺突文やハケ目沈線はなくなり、東海東部系の壺（第242図16）のKi1は櫛描直線文と波状文で、Kiは羽状縄文である（上位LRは端末結節で、下位RLは

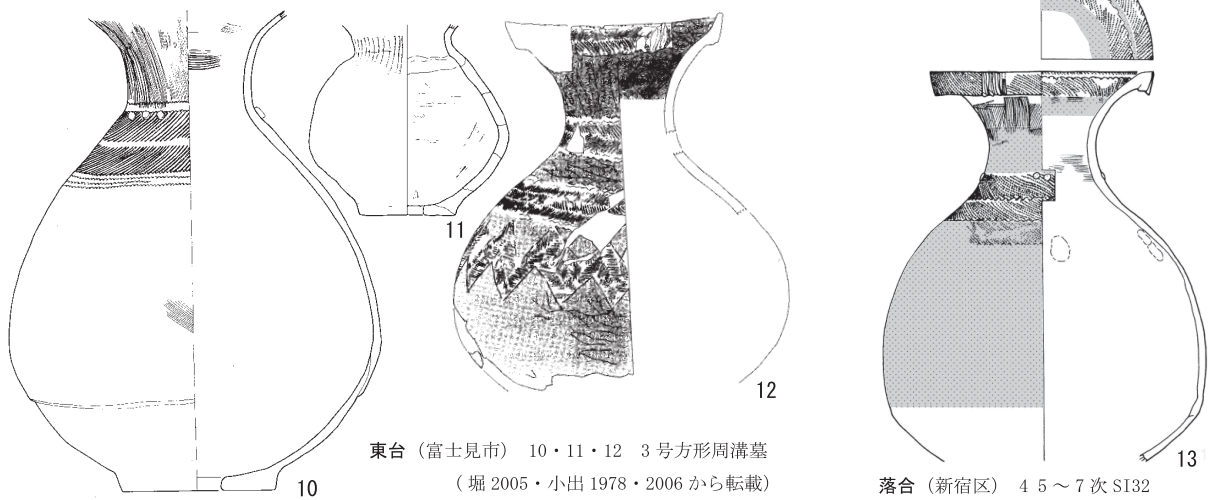


ヘラミガキされていて不明。第237図16)。幅広複合口縁の下端の突出は明瞭であり、胴部は下位に重心があるものの稜をもつほどではない。棒状浮文が3本で厚みがある折返し状口縁壺(21)は、二帯の自縄結節文区画帯縄文で(第237図19)、久ヶ原式系壺の沈線区画2帯から自縄結節文区画2帯への継承・変換と見たい。午王山遺跡では、104号住の幅広複合口縁壺(第242図1)の下端は16ほど明瞭ではないがはみ出しがあり、5・6(第237図17・18)は羽状縄文と端末結節文の組み合わせで次段階での盛行が準備されている。

甕 ハケ甕は口唇端部の面取はみられず、頸胴部が緩曲で胴部の最大径も中位に移行している(第242図17・18)。折返し状口縁の台付甕(15)は、口縁部が扁平となり緩曲な頸部



① 下戸塚式新・古期と東海西部系高坏との時間的関係を示す資料



② 久ヶ原Ⅱ式・新と下戸塚式新・古 (モミダ型壺) との共伴

③ モミダ型壺の口縁部形態が分かる資料

第243図 下戸塚式新・古期との併行関係土器

から胴部に移る。最大径が口縁部にある輪積み甕（4）は輪積み痕が口辺部だけで頸胴部以下はハケ整形がなされ、ナデ甕（3・10・11）は頸部が緩曲なまま胴部に移行する。

鉢・高坏 鉢（9・19）は小型化している。高坏（20）は、坏部が内湾化し縄文帯の区画は自縄結節文であり、坏部と脚部境の突帯や脚部裾の縄文を付した粘土帯や赤彩など久ヶ原式系の高坏である。脚部の三角形の透かしは久ヶ原遺跡（久が原六-2-7）3号土坑で出土しており（齋藤あ 2017 p. 64）、同土器の坏部口辺部縄文帯には多条の自縄結節文がみられる。同遺構からは頸部より上位だけに輪積み痕を残す台付甕も出土している。同土器は、久ヶ原Ⅱ式に位置づけられている。

c. 下戸塚新期と東海西部との交差編年 午王山遺跡 62 号住出土土器（第 243 図① 1～5）は、区画のないハケ刺突羽状文（1）や沈線区画横帯縄文（2）が残る下戸塚式新・古期だが、高坏（5）は西遠江以西の山中型有段高坏である⁽⁷⁾。城山遺跡 1 号住出土土器（第 243 図① 6～10）は、沈線区画横帯縄文帯下に山形文がずれて重なるが梯子が入り込まない久ヶ原Ⅱ式新の大型壺（8）、やや内湾の単口縁・上位ハケ沈線端末結節文・胴下部重心の菊川式系の壺（6）、辛うじて口唇部面取を残す台付甕（7）、透かし孔のある高坏（9）は下戸塚式新・古期の組み合わせを示している（牧田 1998）。伴った高坏（10）は脚部を欠くが、口唇端部に平端面があり坏部が深く内湾する有稜高坏であって、廻間Ⅰ式（欠山式）成立期の様相をもつ。5 や 10 は外来系で、東海地方西部の山中Ⅱ式 3 段階から 廻間Ⅰ式 0 段階に位置づけられるようなので（赤塚 2002）、下戸塚式新・古期と東海地方西部との併行関係の目安となる。

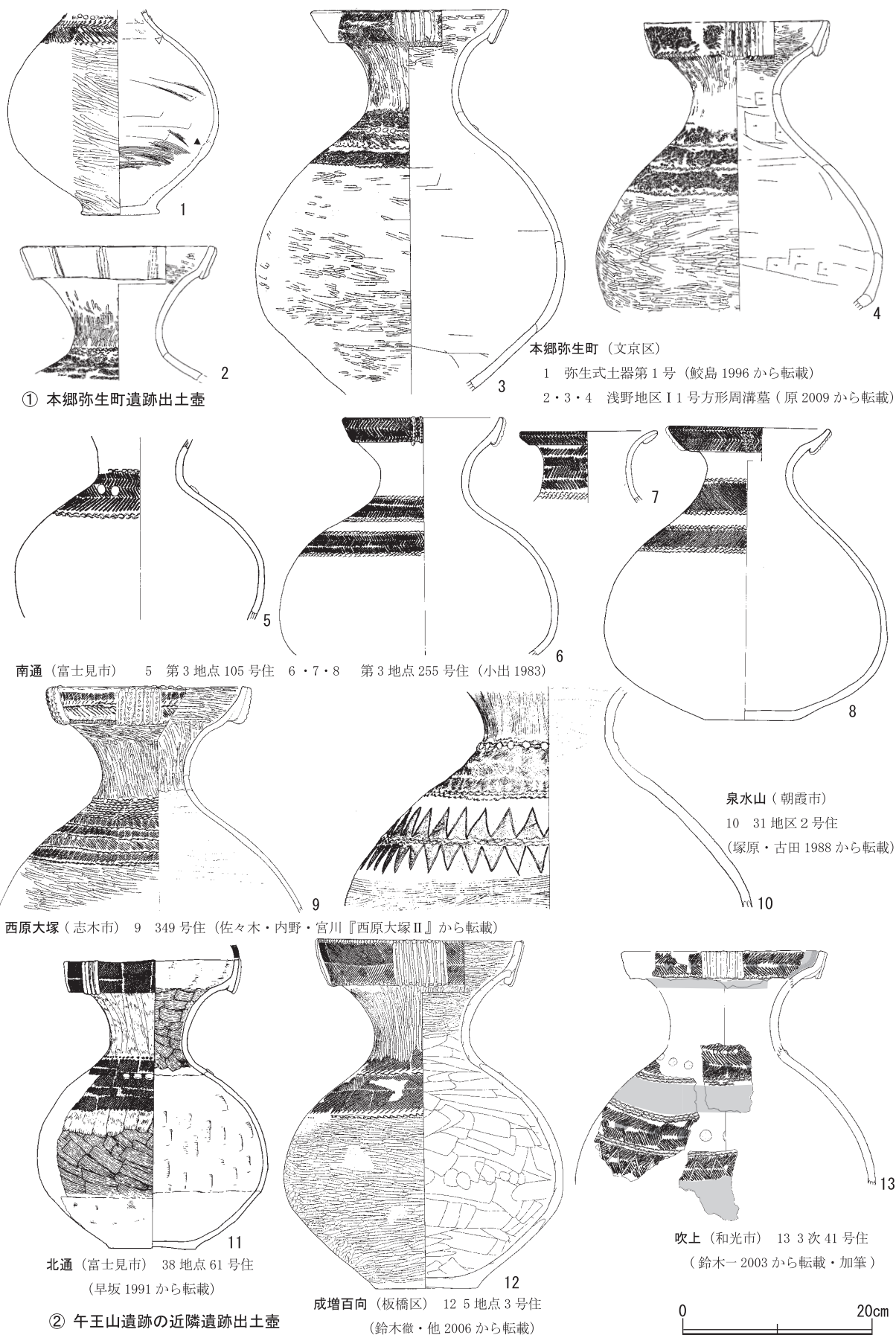
4 下戸塚式以後

下戸塚式終焉後、武蔵野台地東北縁地域では、遺跡の拡大増加が認められるがその土器は弥生町式土器である。前項において、下戸塚式新期では菊川式系の端末結節文で一帯縄文帯を構成する壺が主流を占めるようになってきたが、その正統を継ぐのは「弥生式土器第 1 号」の本郷弥生町遺跡出土壺（石川 2008 pp. 76-79）に他ならない（第 244 図 1）。Ki1 と Ki の構成がこの段階まで活着しているとすれば、この土器が横羽状端末結節文一帯で上方に浮文があるのは Ki だけの構成だからである。この土器は口縁部を欠失しているが、浅野地区 11 号方形周溝墓から出土した 2 点（3・4）は幅広複合口縁である。2 点とも複合口縁の下端が突出し棒状浮文も 5 条と多くなっており、4 では端末結節縄文帯 3 段の構成で円形赤彩文も観察できる。3 の頸部直下の縄文帯は、Ki1 が無節 Lr 端末結節であり、下位の羽状縄文帯を Ki とすれば円形浮文の位置は Ki1 と Ki の中間点で下戸塚式中期以降の構造が継承されているのである⁽⁸⁾。3・4 のような端末結節文一帯縄文帯壺とともに出土した第 244 図 2 は、自縄結節文で上下区画する幅広一帯縄文壺であり、東海東部系と久ヶ原式系の要素が一体化して作出されたものとみる。

午王山遺跡周辺では、富士見市 / 南通遺跡第 3 地点出土壺（第 244 図 5）や志木市 / 西原大塚遺跡 349 号住出土壺（9）が結節文区画縄文一帯壺であり、結節文区画縄文帯の下位に変質沈線区画山形文壺（10）や結節文区画二帯縄文帯壺（6・8）は久ヶ原式系壺で、下戸塚式を継承する構成要素である。斉藤瑞穂氏が下戸塚Ⅱ式の例としてあげた吹上遺跡 3 次 41 号住出土壺（13）の下位縄文帯は、横帯縄文帯と変質山形文が一体となり鋸歯文化した 10 からの系統と見られる。一帯縄文壺は、複合口縁部が直立し、より幅広となって棒状浮文数が増加するとともに胴部の円形化などの発達をみせる（11・12）。古屋紀之氏が「狭義の弥生町式」と称した本郷弥生町出土壺を、改めてカッコなしで弥生町式土器と呼称すべきと主張したい。

5 終わりに

武蔵野台地東北縁地域の弥生時代中期後半から後期後半にかかる土器編年を記してきた



第244図 午王山遺跡にはない弥生町式土器の壺

が、午王山遺跡の環濠集落造営期である下戸塚式については古・中・新期と時期分類した。今後、周辺資料の増加に合わせて分析が精緻化すれば、1期・2期・3期・・・に、あるいは、1式・2式・3式・・・に分類できる日が来ることを期待したい。更に、弥生時代後期末から古墳時代前期にかかる弥生町式土器・前野町式土器・五領式土器の土器編年についても記述を進めたいところであるが、すでに紙幅も尽きている。機会があれば改めて稿を草することとし、ここではこれまでの記述と若干の追加を第245・246・247図と第30表のようにまとめ、筆者の責を果たしたことにする。

第30表 午王山遺跡とその周辺域 弥生時代中期後半から後期末の編年

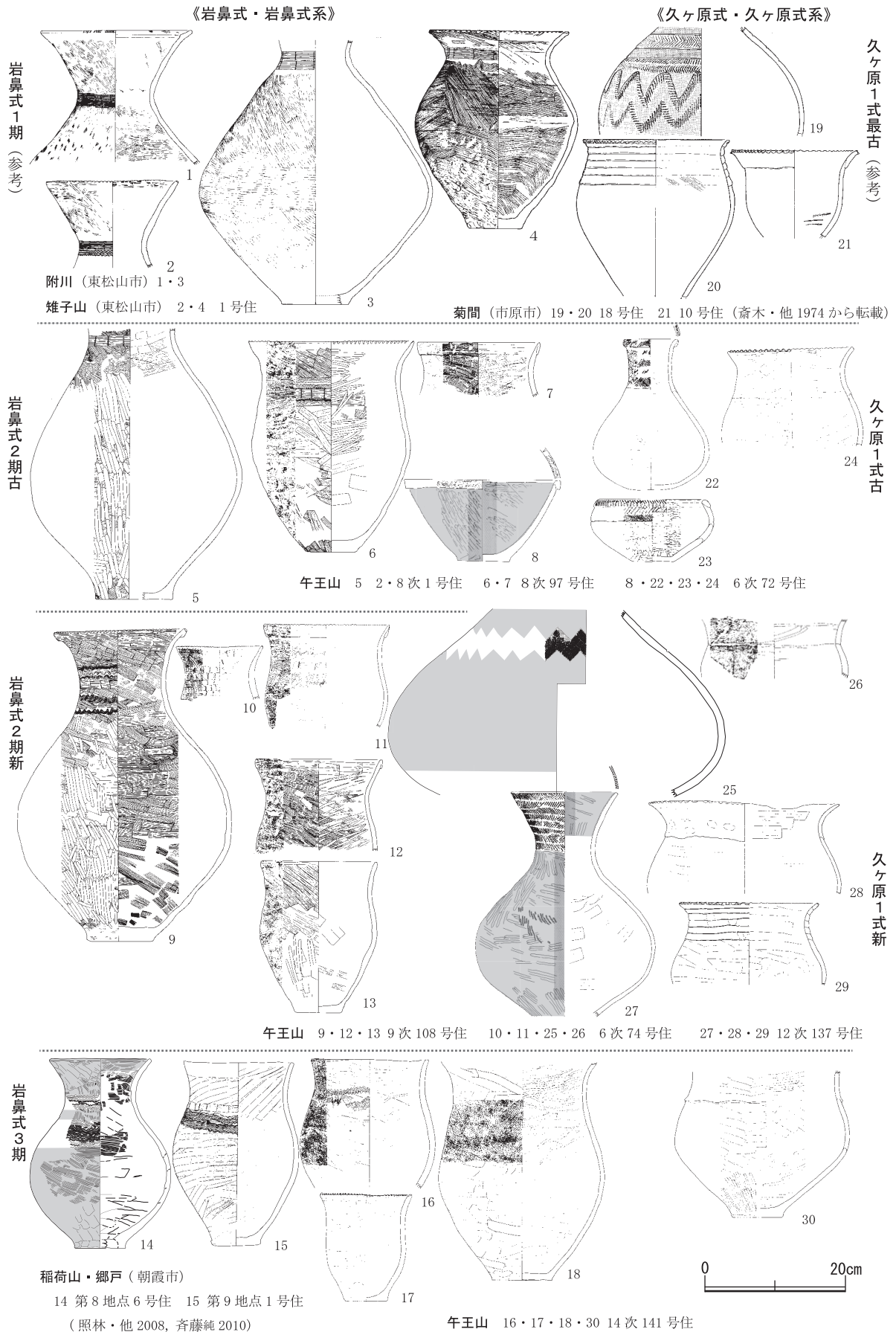
土器型式		武蔵野台地東北縁（白子川・越戸川・黒目川・柳瀬川流域）		北武蔵	南武蔵南部	東海東部など
		午王山遺跡 遺構	近隣遺跡・遺構			
宮ノ台式	Ⅲ期	—	花ノ木4次10住	北島式	宮ノ台式Ⅲ期	白岩式
	Ⅳ期	—			宮ノ台式Ⅳ期	
	Ⅴ期	82住、87住、133住	新屋敷第1地点6住 本村南	仮用土・平式 仮代正寺式	宮ノ台式Ⅴ期	
岩鼻式1期		—	—	岩鼻式1期	久ヶ原Ⅰ式古	菊川式最古
岩鼻式2期古		1住、3住、72住、97住	氷川神社北方21住	岩鼻式2期古		
岩鼻式2期新		74住、108住、124住、137住		岩鼻式2期新	久ヶ原Ⅰ式新	菊川式古
岩鼻式3期		81住、105住、141住、(18住、119号住)	稲荷山・郷戸9地点9住	岩鼻式3期		
下戸塚式古		—	花ノ木 県1方形周溝墓			
下戸塚式中・古	4住、8住、9住、11住、20住、24住、27住、57住、59住、68住、73住、75住、84住、86住、90住、91住、93住、100住、107住、110住、113住、118住、121住、128住、129住、138住、144住、A溝（3次2溝・7次2溝・5次A区1溝）	吹上3次26住・41住 四ツ木4次30住	吉ヶ谷1式1期	久ヶ原Ⅱ式古 北川谷3期古	菊川式中～新	
						吉ヶ谷1式2期
下戸塚式中・新	5住、10住、12住、14住、16住、30住、42住、44住、50住、51住、52住、58住、63住、69住、77住、78住、88住、92住、95住、130住、132住、142住、146住、A溝（4次2溝・5次B区2溝・2次1溝・10次1溝・11次1溝）	中道・岡台第3地点1溝 新屋敷1地点3号住	吉ヶ谷1式3期	久ヶ原Ⅱ式新 北川谷3期新	山中式Ⅲ廻間Ⅰ式	
下戸塚式新・古	19住、62住、(101住)	吹上3次12住、3次3溝 城山1住 東台3号方形周溝墓	吉ヶ谷2式1期	北川谷4期古		
下戸塚式新・新	23住、96住、104住、109住、114住	田子山31地点21住	吉ヶ谷2式2期	久ヶ原Ⅲ式 北川谷4期新	菊川式最新	
弥生町式古		南通3地点105住 西原大塚349住	吉ヶ谷系	日吉台／北川谷5期古 北川谷5期新	廻間Ⅱ式前半 廻間Ⅱ式後半	
弥生町式新		北通38・39地点61住 成増百向5地点3住				
前野町式古		富士前15地点1住	吉ヶ谷系			
前野町式新		南通3地点109住 成増一丁目2住				

*宮ノ台式 安藤(1990)、久ヶ原式 安藤(2017)、北武蔵 柿沼(2012)、北川谷(古屋2013)

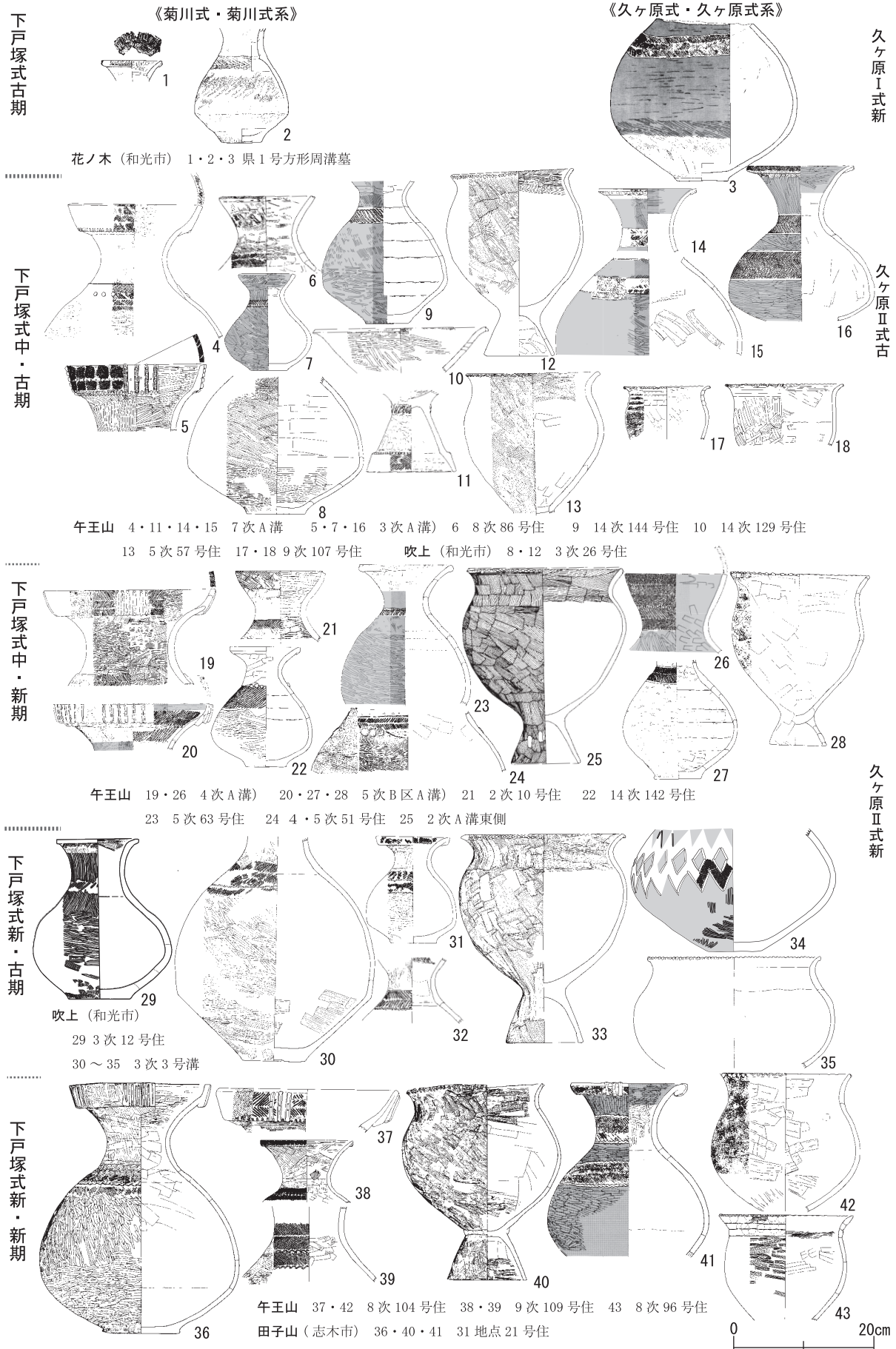
菊川式(篠原2001)、山中式・廻間式(赤塚2002)

なお、本稿を記すにあたっては下記の方々にご教示をいただいた。記して謝意を表したい。

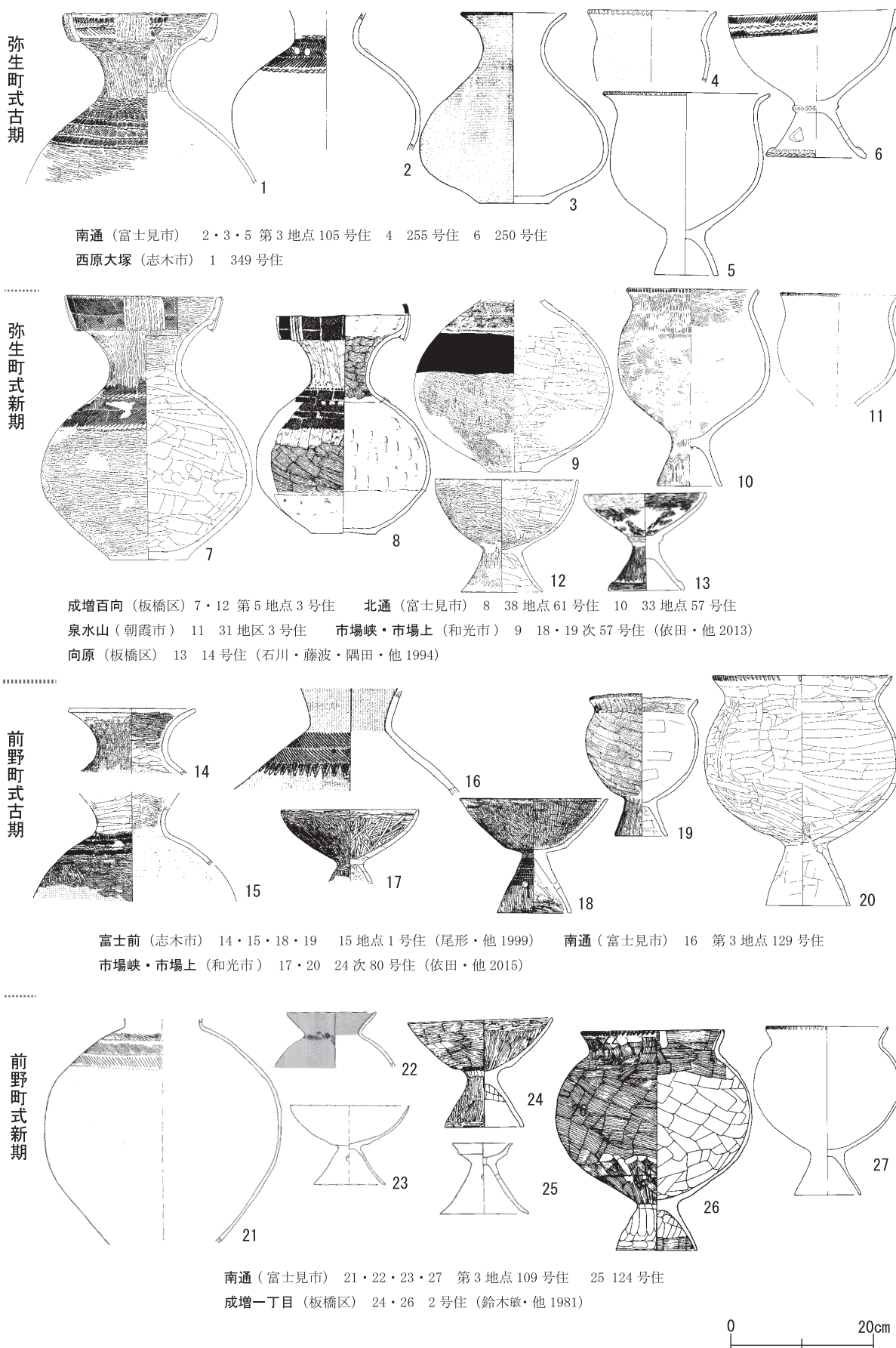
石川日出志、遠藤英子、尾形敏則、小倉淳一、菊池健一、小出輝雄、笹森紀己子、佐藤康二、鈴木一郎、鈴木敏則、鈴木敏弘、宅間清公、轟 直行、野本孝明、前田秀則
松本 完



第245図 武蔵野台地東北縁(白子川・黒目川・柳瀬川流域)後期土器編年 - 1



第 246 図 武蔵野台地東北縁（白子川・黒目川・柳瀬川流域）後期土器編年 - 2



第247図 武蔵野台地東北縁（白子川・黒目川・柳瀬川流域）後期土器編年 - 3

【註】

- 1) 安藤氏は、松本完氏や鈴木正博氏の久ヶ原式論（松本 2005・鈴木正 2009）も参考になったと記している。後者は、菊池義次氏の久ヶ原Ⅱ式（鈴木＝久ヶ原Ⅱ式）の再評価で、大村直氏の久ヶ原Ⅰ式・Ⅱ式の時期区分との相違・齟齬、装飾壺の文様帯系統の誤謬を衝いている。
- 2) 柿沼 2013 では午王山遺跡出土土器の東京湾岸地域との編年対比を、大村 直氏の久ヶ原Ⅰ・Ⅱ式から山田橋式との比較・検討で行ったが、久ヶ原Ⅱ式の扱いに失当があるとの鈴木正博氏の指摘（註 1）を受け、久ヶ原式土器に関しては安藤氏が再設定した編年に準拠する。大村氏は久ヶ原式と山田橋式を分ける基準を壺における結節文区画の採用としている。沈線区画から結節文区画への移行を久ヶ原式／弥生町式区分の基準とする考えを再評価したのは笹森紀己子氏だが（笹森 1984）、氏も久ヶ原Ⅱ式への評価は低い。しかし、武蔵野台地東北縁では沈線文区画が久ヶ原Ⅱ式併行でも根強く残り、結節文区画がみられるようになるのは下戸塚式でも端末結節が盛行する段階以降であり、細別の基準にはなりにくい。下戸塚式中期に伴うのは久ヶ原Ⅱ式とすれば、実態に即した伴出関係が確認できる。
- 3) この資料は、2008 年に開催された「シボジウム南関東の弥生後期土器を考える」で立花実氏から紹介されたもので（立花 2009、大磯町 2007）、会場から篠原和大・鈴木敏則・大木紳一郎氏が発言して評価を加えている。
- 4) 松本氏は「櫛刺突文」と表現しているが、その施文法について佐原 真氏は実験考古学の成果から施文具は薄板状のハケ整形具であり、押しつけることによって施文することから「木目沈線紋」と表現し、工具の長さや押圧の仕方によって「木目列点紋」「木目刻目紋」と区分する（佐原 1987）。篠原和大氏は佐原氏に準拠して「木目沈線文」を用い、同じ工具による「擬縄文」を「ハケ刺突擬縄文」としていたが、その後「ハケ目沈線文」「ハケ刺突文」などとしている（篠原 2009）。直近では轟 直行氏が「ハケ目沈線」「ハケ刺突文」としており（轟 2017）、筆者もこれを採用する。
- 5) 齋藤氏提唱の「下戸塚式（Ⅰ式）」には賛同するが、下戸塚Ⅰ式とした土器群について、東海地方の要素の伝播は一時的で時期を経るごとに減少していく（齋藤瑞 2018 p. 149）、としている点は首肯しがたい。菊川式とは、あるいは東海東部とは、松本氏が記したように「型式変化の軌道が一部共有され」ており、相互関係が波状的に継続されているのが確認できる事実関係である。「本郷弥生町」の出自をことさら東海地方にまで求めなくともよいように、私には思われるのである（齋藤瑞 2018p. 158）ともしているが、首肯できない。東遠江から西駿河に広がるモミダ型壺の端末結節文が新たに波及して取り入れられたのが下戸塚式新期の端末結節文壺であり、それが直接的な系譜として主流化したのが弥生町式土器である。「下戸塚Ⅱ式」を採用できない所以でもある。
- 6) 安藤氏が久ヶ原Ⅱ式古とした壺は結節文や付加条 3 種と沈線区画が併用されており、結節文区画横帯縄文の事例としてあげた影向寺出土壺は久ヶ原Ⅱ式新に置いている（安藤 2017）。都立田園調布高等学校地内遺跡 2 号方形周溝墓出土土器に 4 条の結節により区画した二帯横帯縄文と下部に山形文を配した壺がある（斉藤あ 2017）。山形文はやや崩れているが、口縁部は折返し状口縁で外方に開き、頸胴部も縦に長く、同書では久ヶ原Ⅱ式古段階に位置づけられている（p. 69）。東台遺跡出土壺は本文中に述べたとおりやや新しい要素があり、久ヶ原Ⅱ式新段階としたいところである。
- 7) 山中型有段高坏の管見に触れた出土例として、大田区／熊野神社付近遺跡 Y- 4 号住出土高坏（米川・他 1991、野本 2017）や目黒川流域の烏森遺跡Ⅰ次環濠上層出土高坏（合田・本山 2012）があげられる。前者は、久ヶ原Ⅱ式古に伴っており、坏部に櫛描波状文が施された山中Ⅱ式ⅠないしはⅡ段階と見ら

れる。後者は、櫛描波状文を欠く山中Ⅱ式3段階で熊野神社例より新しく、午王山5次62号住出土事例に近い。環濠上層からは吹上遺跡3次3号溝出土壺（第12図17）と同様の山形文が重なって連続菱形文となった壺が出土している（ただし、羽状縄文ではなく斜行縄文）。同中層からは結節文区画二帯でその下位に沈線区画山形文を配した壺も出土しており、前後関係があるとしても近接した時期と考えたい。

- 8) 設楽博己氏は、この土器は東海東部の土器と同じ特徴をもつとしつつ円形浮文が縄文の上端に付いていることは駿河地方にない、との加納俊介氏の指摘（シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会2005）を紹介し、地元で製作されたものとしている（設楽2011p.66）。そのとおりであるが、本文中に記したように本来浮文はKi1とKiの中間点にあり、Ki1とKiのどちらかの省略によって浮文の位置に変動が生じる。このことは、下戸塚式の段階から確認できる。

【引用・参考文献（図版出典を含む）】

- 赤塚次郎 2002「Ⅱ 濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡 考察編』愛知県埋蔵文化財センター 調査報告書第92集 pp.25-4 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 天ヶ嶋岳 2003『川越城跡（第11次調査）』川越市遺跡調査会発掘調査報告書第27集 川越市遺跡調査会
- 安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」上・下『古代文化』第42巻第6・7号 財団法人 古代学協会
- 安藤広道 1996「第Ⅲ部 編年編 南関東地方（中期後半・後期）」『YAI!』pp.241-258 弥生土器を語る会
- 安藤広道 2009「東京湾西岸～相模川流域の後期弥生式土器の検討」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー16 pp.114-128 関東弥生時代研究会 埼玉弥生土器観会 八千代栗谷遺跡研究会編 六一書房
- 安藤広道 2015a「Ⅳ、各地の弥生土器及び平行期土器群の研究6 関東」『弥生土器』考古調査ハンドブック12 pp.344-396（株）ニューサイエンス社
- 安藤広道 2015b「コラム1 久ヶ原・弥生町期の未来？」『列島東部における弥生後期の変革』考古学リーダー24 pp.279-286 西相模考古学研究会 西川修一・古屋紀之編 六一書房
- 安藤広道 2017「久ヶ原遺跡と久ヶ原式土器」『土器から見た大田区の弥生時代—久ヶ原遺跡発見、90年—』pp.152-161 平成28年度特別展 大田区立郷土博物館
- 石川日出志・藤波啓容・隅田 眞・他 1994『向原遺跡』東京都住宅局 板橋区向原遺跡調査会
- 石川日出志・藤波啓容・他 1999『西台後藤田遺跡発掘調査報告書—第1地点—』東京都住宅局、都内第二遺跡調査会 西台遺跡調査団
- 石川日出志 2008『「弥生時代」の発見 弥生町遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」050 新泉社
- 石川日出志 2010『農耕社会の成立』シリーズ日本古代史①岩波新書1271 岩波書店
- 石川日出志・松田 哲 2014「総論」『熊谷市前中西遺跡を語る』考古学リーダー23 pp.3-33 関東弥生文化研究会埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 石川安司・柿沼幹夫・宅間清公 2017「ときがわ町破岩遺跡—関東地方西部域 弥生時代中期末葉の遺跡・

- 遺物の一事例—』『埼玉考古』第52号 pp.19-30 埼玉考古学会
- 石坂俊郎・他 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第134集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 市毛 勲・車崎正彦・松本 完・他 1996『下戸塚遺跡の調査』第2部 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編 早稲田大学
- 伊藤玄三・守屋幸一 2000『中台畠中遺跡発掘調査報告書』中台畠中遺跡調査会 日立製作所
- 江原 順 1998「朝霞市郷戸遺跡出土の土器」『あらかわ』創刊号 pp.23-28 あらかわ考古談話会
- 照林敏郎・江原 順 2002『中道・岡台遺跡第3地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財調査報告書第20集 朝霞市教育委員会
- 大磯町編 2007『大磯町史10 別冊 考古』
- 大村 直 2004『市原市山田橋大山台遺跡』市原市文化財センター調査報告書第88集
- 尾形敏則 1998「志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例について—田木山遺跡第31地点の弥生時代21号住居跡出土の資料—」『あらかわ』創刊号 pp.35-53 あらかわ考古談話会
- 尾形則敏 1999「第3章 富士前遺跡第15地点の調査」『志木市遺跡群9』志木の文化財第27集 pp.16-21 埼玉県志木市教育委員会
- 柿沼幹夫 2003「芝川流域の宮ノ台式土器」『埼玉考古』第38号 pp.61-101 埼玉考古学会
- 柿沼幹夫 2006「岩鼻式土器について」『土曜考古』第30号 pp.1-28 土曜考古学研究会
- 柿沼幹夫 2009「補足・意見—和光市午王山遺跡における岩鼻式土器—」『南関東の弥生土器2—後期土器を考える—』考古学リーダー16 pp.192-202 関東弥生時代研究会 埼玉弥生土器観会 八千代栗谷遺跡研究会編 六一書房
- 柿沼幹夫 2012『弥生時代後期地域社会の考古学的研究—北武蔵地方を中心に—』埼玉大学大学院文化科学研究科
- 柿沼幹夫 2013「荒川下流域弥生時代後期土器に関する覚書」『埼玉考古』第48号 pp.5-28 埼玉考古学会
- 柿沼幹夫 2014「前中西遺跡の周辺を巡る課題」『熊谷市前中西遺跡を語る』考古学リーダー23 pp.67-89 関東弥生文化研究会 埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 柿沼幹夫 2016「頸胴部帯縄文甕—交差編年・地域間交流の鍵—」『埼玉考古』第51号 pp.19-36 埼玉考古学会
- 栗原文蔵・野部徳秋 1973『岩の上・雉子山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集 埼玉県教育委員会
- 黒沢 浩 2003「神奈川県二ッ池遺跡出土弥生土器の再検討—二ッ池式土器の提唱—」『明治大学博物館研究報告』第8号 pp.21-58 明治大学博物館事務室
- 黒沢 浩 2005「南関東における弥生時代後期土器群の動向—二ッ池式土器の検討を中心に—」『駿台史学』第124号 pp.49-72 駿台史学会
- 小出輝雄 1978『富士見市中央遺跡群I』文化財調査報告第15集 富士見市教育委員会
- 小出輝雄 1983『針ヶ谷遺跡群—南通遺跡第3地点の調査—』富士見市遺跡調査会調査報告第21集 富士見市遺跡調査会
- 小出輝雄 2006「埼玉の弥生後期土器についての一考察（予察）」『埼玉の考古学II』 pp.251-260 埼玉考古学会編 六一書房

- 合田芳正・本山直子（2012）『烏森遺跡第1次発掘調査報告書』目黒区埋蔵文化財発掘調査報告書第24集 共和開発株式会社
- 小林行雄・杉原荘介編 1968a『弥生式土器集成 本編1』日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会 東京堂
- 小林行雄・杉原荘介編 1968b『弥生式土器集成 本編2』日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会 東京堂
- 小林理恵 1995「西台遺跡」『板橋区史 資料編1 考古』pp.502-507 板橋区
- 斎木 勝・他 1974『市原市菊間遺跡』房総考古資料刊行会
- 埼玉考古学会編 1976『埼玉県土器集成4』
 今泉泰之「附川遺跡」pp.31-32 図版7
 柿沼幹夫「竹間沢本村遺跡」pp.45-47 図版16
 佐々木保俊「南通り遺跡」pp.40-42 図版12・13
 谷井 彪「台の城山遺跡」pp.43-45 図版14・15
- 齋藤あや 2017『土器から見た大田区の弥生時代—久ヶ原遺跡発見、90年—』平成28年度図録 大田区立郷土博物館
- 斉藤 純 2010「第8章 稲荷山・郷戸遺跡第9地点の調査」『朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告集報1』朝霞市埋蔵文化財調査報告書第33集 朝霞市教育委員会
- 齋藤瑞穂 2010「下戸塚式という視点」『古代』第123号 pp.53-72 早稲田大学考古学会
- 齋藤瑞穂 2018「第9章 下戸塚式という視点—関東地方後期弥生土器型式の提唱—」『弥生土器型式細別論』pp.140-159 同成社
- 佐々木保俊・小出輝雄 1984『針ヶ谷遺跡群』富士見市遺跡調査会調査報告第23集 富士見市遺跡調査会
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳『西原大塚遺跡Ⅱ』埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合 埼玉県志木市教育委員会
- 笹森紀己子 1984「久ヶ原式から弥生町式へ—壺形土器の文様を中心に—」『土曜考古』第9号 pp.17-40 土曜考古学研究会
- 佐原 真 1987「9 補塙 2.B. 遠賀川系土器の技法」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ pp.218-222 雄山閣
- 鮫島和大 1996「弥生町の壺と環濠集落」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第14号 pp.131-154 東京大学文学部考古学研究室
- 篠原和大・山下英郎 2000「静岡県における後期弥生土器の編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』〔第1分冊〕pp.72-197 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 福島県立博物館
- 篠原和大 2001「駿河地域の後期弥生土器と土器の移動（補遺）」『シボ・ジウム 弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』資料集 pp.58-67 西相模考古学研究会
- 篠原和大 2002「第Ⅰ部 各地域の様式と編年5（2）東遠江 第Ⅴ様式」『弥生土器の様式と編年 東海編』pp.589-610 加納俊介・石黒立人編 木自社
- 篠原和大 2009「南関東・東海東部地域の弥生後期土器の地域性—とくに菊川式土器の東京湾北東岸への移動について—」『南関東の弥生土器2—後期土器を考える—』pp.246-254 関東弥生時代研究会

- 埼玉弥生土器観会 八千代栗谷研究会編 六一書房
- 設楽博己 2011「弥生式土器の発見」『弥生誌－向岡記碑をめぐって』 pp. 62-72 東京大学総合研究博物館
- シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編 2005『南関東の弥生土器』考古学リーダー 5 六一書房
- 加納俊介 p. 167
- 黒沢 浩「5. 弥生町式と前野町式」 pp. 49-55
- 松本 完「4. 久ヶ原式」 pp. 40-48
- 鈴木一郎 2001『峯前遺跡（第3次） 花ノ木遺跡（第4次） 吹上遺跡（第4次） 吹上原遺跡』和光市教育委員会
- 鈴木一郎 2003『吹上遺跡（第3次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第30集 和光市遺跡調査会 和光市教育委員会
- 鈴木一郎 2004『四ツ木遺跡（第4次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第34集 和光市遺跡調査会 和光市教育委員会
- 鈴木孝之 1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木 徹・他 2006『成増百向遺跡第5地点』扶桑レクセル 共和開発 アルケーリサーチ
- 鈴木正博 2009「「久ヶ原2式」への接近」『南関東の弥生土器2－後期土器を考える－』 pp. 229-239 関東弥生時代研究会 埼玉弥生土器観会 八千代栗谷研究会編 六一書房
- 鈴木敏弘・他 1981『成増一丁目遺跡発掘調査報告』成増一丁目遺跡調査会
- 鈴木敏弘 1995「赤塚氷川神社北方遺跡」『板橋区史 資料編1 考古』 pp. 430-453 板橋区
- 杉山祐一 2010「房総における宮ノ台式土器から久ヶ原式土器への変遷」『西相模考古』第19号 pp. 1-38 西相模考古学研究会
- 宅間清公・他 2017『中野遺跡第91地点』志木市の文化財第67集 埼玉県志木市教育委員会
- 立花 実 2009「Ⅱ 討論の記録 7. 大磯町馬場台遺跡第19地点の資料をめぐって」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー 16 pp. 164-168 関東弥生時代研究会 埼玉弥生土器観会 八千代栗谷遺跡研究会編 六一書房
- 谷井 彪 1966「大和町新倉午王山出土の弥生式土器」『埼玉考古』第4号 埼玉考古学会
- 谷井 彪・高山清司 1968「大和町の遺跡と出土土器（弥生・古墳時代）」『埼玉考古』第6号 pp. 30-54 埼玉考古学会
- 谷井 彪・宮崎朝雄 1975『台の城山遺跡発掘調査報告書』朝霞市文化財調査報告書第5集 朝霞市教育委員会
- 塚原正典・古田 幹 1988「第11章 泉水山遺跡第31地区の調査」『泉水山・下ノ原遺跡Ⅲ』朝霞市泉水山・下ノ原遺跡調査会
- 照林敏郎・他 2008『稻荷山・郷戸遺跡第8地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第26集 朝霞市教育委員会
- 照林敏郎・江原順・他 2002『中道・岡台遺跡第3地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 朝霞市教育委員会
- 徳澤啓一・小木谷晃与 1999『落合遺跡Ⅲ』学校法人目白学園 新宿区落合遺跡調査団

- 轟 直行 2017「菊川式土器の成立に関する研究」『古代文化』VOL. 69 pp. 22-40 公益財団法人 古代学協会
- 中嶋郁夫 1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』2号 pp. 119-150 転機同人会
- 中嶋郁夫 1991「東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模倣」－「菊川様式」編－」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』『転機』4号 pp. 75-94 第8回東海埋蔵文化財研究会
- 野本孝明 2017「多摩川下流域左岸産の久ヶ原式土器の移動とその評価」『東京考古』No. 35 pp. 21-53 東京考古談話会
- 早坂廣人 1991「第4章 北通遺跡第38・39地点」『富士見市遺跡群IX』富士見市文化財報告第41集 埼玉県富士見市教育委員会
- 原 祐一 2009『東京大学本郷溝内の遺跡 浅野地区Ⅰ』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 東京大学埋蔵文化財調査室
- 比田井克仁 1991「山中式・菊川式東進の意味すること」『東海系土器の移動から見た東日本の弥生土器』『転機』4号 pp. 153-171 第8回東海埋蔵文化財研究会
- 比田井克仁 2005「テーマ3. 後期土器の地域性 報告(1)－久ヶ原式・弥生町式の今日－」『南関東の弥生土器』考古学リーダー5 pp. 125-134 シンポジウム 南関東の弥生土器実行委員会編 六一書房
- 古屋紀之 2013「横浜市都筑区北川谷遺跡群における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年」『横浜市歴史博物館紀要』第17号 pp. 1-30 横浜市歴史博物館
- 古屋紀之 2014「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『久ヶ原・弥生町期の現在－相模湾／東京湾の弥生後期の様相－』pp. 29-44 西相模考古学研究会 記念シンポジウム資料集
- 古屋紀之 2015「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』考古学リーダー24 pp. 19-35 西相模考古学研究会 西川修一・古屋紀之編 六一書房
- 古屋紀之 2018「久ヶ原・弥生町問題再論」『西相模考古』第27号 pp. 41-67 西相模考古学研究会
- 堀 善之 2005「東台遺跡第24地点」『富士見市内遺跡XⅢ』富士見市文化財報告第57集 埼玉県富士見市教育委員会
- 牧田 忍 1998『花ノ木遺跡第2次 城山遺跡』和光市埋蔵文化財調査報告書第21集 和光市遺跡調査会 和光市教育委員会
- 牧田 忍 2009「武蔵野台地後期弥生土器考」『埼玉考古』第44号 pp. 13-28 埼玉考古学会
- 松尾茂美 1995「沖山遺跡」『板橋区史 資料編1 考古』pp. 454-463 板橋区
- 松本 完 1991「東海系土器群の受容と変容－南関東地方の事例について－」『東海系土器の移動から見た東日本の弥生土器』『転機』4号 pp. 141-151 第8回東海埋蔵文化財研究会
- 松本 完 1993「南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性」『翔古論聚』pp. 47-70 久保哲三先生追悼論集刊行会
- 松本 完 1996「第4章 第1節 出土土器の様相と集落の変遷」『下戸塚遺跡の調査』第2部 pp. 581-647 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編 早稲田大学
- 松本 完 2007「武蔵野台地北部の後期弥生土器編年－埼玉県和光市午王山・吹上遺跡出土土器を中心として－」『埼玉の弥生時代』pp. 263-290 埼玉弥生土器観会編 六一書房

- 森本六爾・小林行雄編 1938・1939『弥生式土器聚成図録 正編』・『同 解説』 東京考古学会学報第1冊
東京考古学会
- 安田脩一 2017『装飾壺からみた弥生時代の朝霞』第32回企画展 朝霞市博物館
- 依田賢仁・他 2013『市場峡・市場上遺跡（第18・19次調査）』和光市埋蔵文化財調査報告書第51集
和光市遺跡調査会 和光市教育委員会
- 依田賢仁・他 2015『市場峡・市場上遺跡（第24次調査）』和光市埋蔵文化財調査報告書第58集 和光
市遺跡調査会 和光市教育委員会
- 米川仁一 1991「第Ⅸ章 第3項 弥生土器」佐々木藤雄編『山王三丁目遺跡』pp.189-203 熊野神社遺
跡群調査会